

旭・小島古墳群

— 石神境古墳 —

2 0 1 0

本 庄 市 教 育 委 員 会

旭・小島古墳群

— 石神境古墳 —

2 0 1 0

本 庄 市 教 育 委 員 会

序

本庄市はかつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者高保己一生涯の地として広く知られるところです。そうした歴史的な背景と文化的風土をもつ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書は本庄市万年寺3丁目に所在する石神境古墳の発掘調査成果を記録したものです。石神境古墳は古墳時代後期に属する小さな円墳ですが、調査の結果、数多くの円筒埴輪とともに、2棟の家形埴輪と3体の男女の人物埴輪が出土しました。家形埴輪は入母屋式と呼ばれる現在の神社建築に似た構造の屋根をもつことが特徴で、わが国の建築史を語るうえで貴重な資料となるものです。また、男女の人物埴輪は、頭に被り物を付け、美豆良や鬘を結び、首には玉を飾るなど非常に表現が豊かで、古墳時代の人々の髪形や衣装の解明に重要な手掛かりを与えてくれています。

こうした大切な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与えられた責務であり、地域の歴史を明らかにすることは、わたくしたちがよりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査に際してご指導、ご協力を賜りました方々、直接作業の労にあられた皆様に、衷心よりの感謝を申し上げます。

平成22年3月

本庄市教育委員会

教育長 茂木 孝彦

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市万年寺1丁目地内に所在する石神境古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、土地改良事業に伴う土取り作業に先立ち、記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査期間・発掘調査面積および発掘調査担当者は以下のとおりである。

調査期間

自 昭和60年6月20日

至 昭和60年8月1日

調査面積 1,700㎡

4. 整理調査期間は以下のとおりである。

自 平成21年4月1日

至 平成22年2月25日

5. 整理調査および本書の編集担当者は以下のとおりである。

本庄市教育委員会文化財保護課 太田博之

6. 本書の執筆担当者は以下のとおりである。

本庄市教育委員会文化財保護課 太田博之

7. 本書に掲載した遺構実測図、遺構写真撮影は発掘調査担当者が行なった。

8. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。

9. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

新井 端 江原昌俊 大谷 徹 加部 二生 昆 彭生 坂本和俊 賀来孝代
島田孝雄 志村 哲 杉山晋作 滝沢 誠 鳥羽政之 日高 慎 外尾常人
金子彰男 田村 誠 長井正欣 中沢良一 丸山 修 山崎 武 横澤真一

10. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書編集・刊行に係る本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

・発掘調査（昭和60年度）

教 育 長 坂本 敬信

〈社会教育課〉

社会教育課長 戸塚 克男

指 導 主 事 矢崎 昭夫

課 長 補 佐 長谷川道夫（文化財保護係長兼務）

文化財保護係

主 事 長谷川 勇

中田 啓一

主 事 補 増田 一裕

調 査 担 当 者 増田 一裕

・整理調査および報告書編集・刊行（平成21年度）

教 育 長 茂木 孝彦

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 腰塚 修

文化財保護課長 儘田 英夫

同 課 長 補 佐 鈴木 徳雄

埋蔵文化財係

係 長 太田 博之

主 査 恋河内 昭彦

主 査 大熊 季広

主 任 松本 完

主 任 松澤 浩一

臨 時 職 員 的野 善行

調 査 担 当 者 太田 博之

凡 例

1. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。
遺構実測図… 1/80
遺物実測図… 1/4
2. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
3. 遺構断面図のスクリーントーンは地山のローム層を示す。
4. 観察表中の単位は、法量はcm、重さはgである。()内の数値は推定値を示す。
5. 本書掲載の地形図は、国土交通省国土地理院発行1/50,000「高崎」を用いた。
6. 本書掲載の調査区位置図は、本庄市都市計画図1/2,500に加筆したものをを用いた。
7. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 調査の方法と経過	1
II 遺跡の環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 旭・小島古墳群の概要	6
III 調査の成果	
1 遺 構	13
2 遺 物	13
IV 結 語	38
引用・参考文献	
写真	

挿図目次

図1	埼玉県の地形	1
図2	周辺の遺跡	3
図3	旭・小島古墳分布図	7
図4	調査区位置図	9
図5	調査区全体図	10
図6	石神境古墳全体図	11・12
図7	石神境古墳周堀断面図	14
図8	石神境古墳埴輪出土状況図	15・16
図9	石神境古墳出土円筒埴輪実測図(1)	17
図10	石神境古墳出土円筒埴輪実測図(2)	18
図11	石神境古墳出土円筒埴輪実測図(3)	19
図12	石神境古墳出土円筒埴輪実測図(4)	20
図13	石神境古墳出土円筒埴輪実測図(5)	21
図14	石神境古墳出土円筒埴輪実測図(6)	22
図15	石神境古墳出土円筒埴輪実測図(7)	23
図16	石神境古墳出土円筒埴輪実測図(8)	24
図17	石神境古墳出土円筒・朝顔形埴輪実測図(9)	25
図18	石神境古墳出土形象埴輪実測図(1)	28
図19	石神境古墳出土形象埴輪実測図(2)	29
図20	石神境古墳出土形象埴輪実測図(3)	30
図21	石神境古墳出土形象埴輪実測図(4)	31
図22	石神境古墳出土形象埴輪実測図(5)	33
図23	石神境古墳出土形象埴輪実測図(6)	34
図24	石神境古墳出土形象埴輪実測図(7)	35
図25	石神境古墳出土形象埴輪実測図(8)	36
図26	石神境古墳出土形象埴輪実測図(9)	37

写真目次

- | | | | | | |
|-----|-------|----------------------------|------|-------|-----------------------------|
| 写真1 | 石神境古墳 | 墳丘全体検出状況
[南東から] | 写真5 | 石神境古墳 | 形象埴輪3(男子人物)
ほか出土状況 [西から] |
| | 石神境古墳 | 墳丘南西半検出状況
[南東から] | | 石神境古墳 | 形象埴輪4(女子人物)
出土状況 [南から] |
| | 石神境古墳 | 墳丘北東半検出状況
[南東から] | 写真6 | 石神境古墳 | 形象埴輪5(女子人物)
出土状況 [南から] |
| 写真2 | 石神境古墳 | 北西側周堀検出状況
[南東から] | | 石神境古墳 | 周堀内円筒埴輪検出状況 |
| | 石神境古墳 | 南西側周堀検出状況
[南東から] | | 石神境古墳 | 周堀内円筒埴輪検出状況 |
| | 石神境古墳 | 南西側周堀検出状況
[北西から] | 写真7 | 石神境古墳 | 周堀内円筒埴輪検出状況 |
| | | | | 石神境古墳 | 周堀内円筒埴輪検出状況 |
| | | | | 石神境古墳 | 周堀内円筒埴輪検出状況 |
| 写真3 | 石神境古墳 | 陸橋北側形象埴輪
検出状況 [北西から] | 写真8 | 石神境古墳 | 出土円筒埴輪(1) |
| | 石神境古墳 | 陸橋北側形象埴輪
検出状況 [北東から] | 写真9 | 石神境古墳 | 出土円筒埴輪(2) |
| | 石神境古墳 | 陸橋北側形象埴輪
検出状況 [東から] | 写真10 | 石神境古墳 | 出土円筒埴輪(3) |
| | | | 写真11 | 石神境古墳 | 出土円筒埴輪(4) |
| | | | 写真12 | 石神境古墳 | 出土円筒埴輪(5) |
| | | | 写真13 | 石神境古墳 | 出土円筒埴輪(6) |
| | | | 写真14 | 石神境古墳 | 出土円筒埴輪(7) |
| 写真4 | 石神境古墳 | 陸橋北側形象埴輪
出土状況 [西から] | 写真15 | 石神境古墳 | 出土円筒・朝顔形埴輪(8) |
| | 石神境古墳 | 陸橋北側形象埴輪
出土状況 [南から] | 写真16 | 石神境古墳 | 出土形象埴輪(1) |
| | 石神境古墳 | 形象埴輪3(男子人物)
出土状況 [南から] | 写真17 | 石神境古墳 | 出土形象埴輪(2) |
| | | | 写真18 | 石神境古墳 | 出土形象埴輪(3) |
| 写真5 | 石神境古墳 | 形象埴輪3(男子人物)
出土状況 [北西から] | 写真19 | 石神境古墳 | 出土形象埴輪(4) |
| | | | 写真20 | 石神境古墳 | 出土形象埴輪(5) |

I 調査の方法と経過

調査地には、事前の踏査で、埴輪片の散布が認められたことから、埴丘の消滅した古墳の存在が予想された。調査地は南から北方向へ緩やかに傾斜していることから、等高線に直行するように、幅1mのトレンチを4本設定し、小型重機を用いて表土を除去しつつ遺構の有無を確認した。その結果、埴輪を伴う径10数m規模の円墳の周堀が、調査区内にほぼおさまるように存在していることが明らかになった。そこで、古墳の存在する範囲の表土を重機を用いて除去したのち、人力により遺構の状況確認と開掘を進めた。

開掘作業が進行するにつれ、埴丘の西側は周堀の途切れる箇所があり、この部分に埴丘と周堀の外側をつなぐ陸橋状の施設が存在するらしいこと、埴丘外縁部には南東側の一部を除き、ロームを削り出して緩やかな斜面を造成していることが明らかになった。さらに、埴丘の外縁部から周堀内部にかけて大量の埴輪片が検出され、とくに西側の陸橋状施設に近く埴丘外縁部からは、家・人物などの形象埴輪が集中的に出土し、なかでも家形埴輪は全形を知りうる程度の遺存状況であることが判明した。

現地実測は調査区周囲の地境杭を平面状の基準点とし、調査区の要所に補助杭を設置した。水準は近傍の道路原点から移動しものを用いた。調査記録のうち、主な遺物の出土状況図および遺構平面図は、埴輪樹立の原位置を復元すべく、すべて1/20スケールで、手実測により作成した。また、写真撮影は35mmモノクローム、同カラーリバーサル、6×7版モノクロームを用い、遺物出土状況および遺構検出状況を記録した。

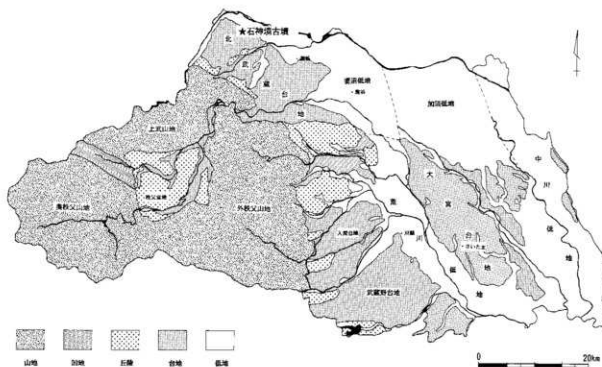


図1 埼玉県の地形

II 遺跡の環境

1 地理的環境

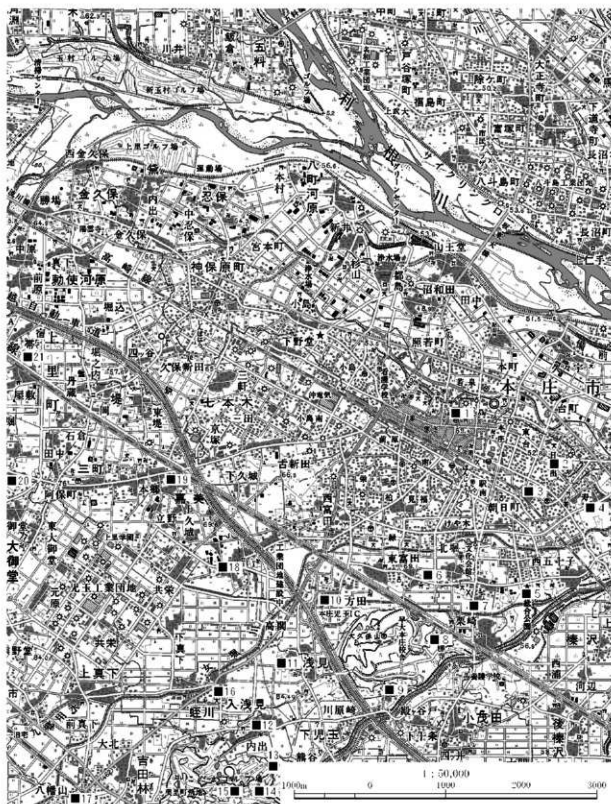
本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地、さらにその南方に連なる山地とに大別される。低地には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。台地は身馴川（小山川）扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川（小山川）扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、小山川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこれの上に立地している。神流川扇状地は群馬県藤岡市浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市鶴森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。また、山地は上武山地の北縁にあたり、奥秩父山地に比べ浸食が進み、谷が広く、起伏の少ない地形を特徴としている。本書に報告する石神境古墳は旭・小島古墳群に属し、本庄市万年寺地内の本庄台地扇端部に立地している。台地縁辺部は東流する元小山川の浸食により比高差6～10mの段丘崖が発達している。

2 歴史的環境

本庄市が所在する児玉地域は、上野国に隣接し、武蔵国にありながら過去において常に隣国の影響下にあった地域である。また、古墳時代においては美里町南志戸川遺跡、同日の森遺跡などにみる畿内系、東海系土器の流入、本庄市ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在など、当該期における流通や生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらに、和泉期の竈導入に見るような先進性や格子タタキ調整技法による土器・埴輪から想定される渡来系工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。本節ではこれらの成果をふまえつつ、児玉地域の古墳の変遷を概観し、石神境古墳をめぐる歴史的環境の理解としたい。

本庄市鷺山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である（坂本1986）。女堀川中流域の丘陵上に位置し、手形形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後墳となることが判明した。特異な形に広がる前方部の平面形や手形形土器の出土から、築造は前方後円墳集成畿内編年（広瀬1992、以下単に集成〇期と略す）2期以前に遡るものとされ、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は、口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部のみに穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階の資料とする理解も可能であり、鷺山古墳の帰属時期は、なお検討の余地を残すといえる。

美里町長坂聖天塚古墳（径50m）は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土櫛と木棺直葬の計6基の埋葬施設から稜雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む滑石製の刀子の形態などから、古墳時代前期後半を下らないと考えられる。



- ★石神境古墳 1. 北原古墳群 2. 御堂坂古墳群 3. 塚合古墳群 4. 鶴森古墳群 5. 西五十子古墳群
 6. 公卿塚古墳群 7. 有勝寺裏地輪窓跡 8. 前山1・2号墳 9. 塚本山古墳群 10. 四方田古墳群
 11. 鷺山古墳 12. 金鑽神社古墳 13. 生野山古墳群 14. 生野山9号墳 15. 生野山將軍塚古墳
 16. 蛭川地輪窓跡 17. 八幡山地輪窓跡 18. 今井古墳群 19. 本郷古墳群 20. 大御堂古墳群 21. 帯刀古墳群

図2 周辺の遺跡

また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長胴化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長板聖天塚古墳に次ぐ時期の築造とされる。大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山2号墳は従来、径28mの円墳とされてきたが本庄市教育委員会による2・3次調査の結果一辺30m前後の方墳となることか確認された(南毛古墳文化研究会2001・松本2002)。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか周堀から土師器埴が検出されている。この北堀前山2号墳と同一尾根上の上位に位置する本庄市北堀前山1号墳は、その立地から築造時期は北堀前山2号墳を遡るものと推定される。現在は径30~40mの円墳とされるが、墳裾から南西方向の尾根上に若干の高まりを認めることから、全長60~70m程度的前方後円墳となる可能性も考えられている。

集成6期を前後する時期には、生野山丘陵の本庄市生野山將軍塚古墳(径60m)、同金鑽神社古墳(径68m)、女堀川流域の本庄市公卿塚古墳(径60m)などの大型の円墳が相次いで築造される。兎玉地方で古墳がもっとも大型化する的是この段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葦石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。生野山將軍塚での実態は明らかではないが、公卿塚ではヨコハケ及びナデ調整によるものと併伴し、金鑽神社古墳ではヨコハケを欠き、一次タテハケのみのものがこれに加わる。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。

これら3古墳に比べてやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳(径40m)、小山川上流域の本庄市長沖157号墳(径32m)ではⅢ式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている事実を確認できる。詳細は不明ながら志戸川左岸の水田地帯に存在する美里町道瀬山古墳(径40m)、同勝丸稲荷古墳(径30m)もこの頃の築造と推定される。

これに対し、集成7・8期には前段階のような直径60mクラス的大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳(径34m)、生野山丘陵の生野山9号墳(径42m)など30~40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、古式群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳(径12m)、同77号墳(径14m)、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳(径19m)、同2号墳(径12m)、同旭・小島古墳群の三空山2号墳(径22m)、上前原5号墳(径26m)、杉の根7号墳(規模未詳)などいずれも10~20m前半台の小型円墳で、Ⅳ式の2条突帯3段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、深谷市白山古墳群などはやや遅れて、Ⅴ式の円筒埴輪とTK23・47段階並行の土器を出土する群集墳である。なお、神川町青柳古墳群では、集成9期前半に、いち早く横穴式石室を導入することが知られている。

集成10期に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にともなってこの時期新たに出現してくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳

群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

また、集成9期以降になると首長墓として前方後円墳が採用されるようになる。小山川上流域では本庄市長沖古墳群の長沖25号墳（40m）、同31号墳（51m）、同秋山古墳群の秋山諏訪山古墳（60m）、同生野山古墳群の生野山鏡子塚古墳（58m）、生野山16号墳（58m）、小山川中流の深谷市四十塚古墳群の寅稲荷古墳（52m）、本庄市塚合古墳群中の大林二子山古墳（規模未詳）、同旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳（規模未詳）、神流川流域の神川町青柳古墳群の白岩鏡子塚古墳（46m）、中新里諏訪山古墳（42m）などが知られる。

終末期には、前方後円墳に代わる首長墓として、深谷市前原愛宕山古墳（辺37m）のような大型の方墳や旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳（径38m）のような大型の円墳が採用されている。また各地の群集墳も後期後半段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、見玉地域で4箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。この地域では、鴻巣市生田塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。

美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵の端部に位置し、南北を二つの小谷によって挟まれ、東方へ延びる舌状丘陵の北側裾部に占地している。埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、いずれも焼土層の落ち込みとして確認されたもので、窯体の規模や構造が判明するものはない。分布調査において確認できた窯跡は12基で、掘削による丘陵断面はさらに東西方向に延長していたが、他には窯跡を認めなかったことから、報告者はこの丘陵斜面に構築された窯の総数は、調査時に確認した12基を上回らなると予測している。

本庄市八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した。その後、1961に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している。現在、遺物の所在が明らかではなく、窯の操業年代、埴輪の型式の特徴などは不明である。

本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際する整地作業中に、焼土とともに馬形埴輪が出土し、また、その後、工場内に機械を設置するため掘削をおこなったところ、ふたたび焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことから埴輪窯跡の存在が想定されている。本庄市教育委員会では、この際に出土したと考えられる家形埴輪片1点を保管している。

本庄市有勝寺裏埴輪窯跡は近年の確認調査で、5基以上の窯跡が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。遺物は鞍形埴輪4点、鬘形埴輪1点をはじめ、家、大刀、鞆、馬、人物など多種の形象埴輪を出土している。円筒埴輪は外面二次調整を欠き、板押圧による基部調整を施す個体がみられること、各種器財埴輪が出揃っていることから、操業時期は6世紀後半段階以降のものと推定される。

なお、美里町から深谷市にかけての山崎山周辺にも埴輪生産遺跡の存在を指摘する意見がある（橋本・佐々木ほか1980）。

3 旭・小島古墳群の概要

石神境古墳の属する小島古墳群は本庄台地北縁部に立地し、本庄市小島地区から上里町神保原地区にかけて分布する。群中央に南南西から北北東方向へ伸びる埋没谷が存在し、現在でも微低地を形成しており、古墳群はこの微低地を隔てて大きく東西二群に分れる。前方後円墳、軌立貝式古墳、円墳、方墳の混成による古墳群で、前期から終末期まで、断続的な造営を認める。以下、時期を追って古墳群の形成過程を概説する。

旭・小島古墳群の形成は西群に群在する方墳の築造をもって開始されると考えられる。方墳は現在まで20基余りが検出されている。万年寺つつじ山古墳（辺25m）は、高さ1.7mの墳丘が残存し、確認調査時に、表土直下で、刀子、斧、直刃鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。出土地点は墳丘中心から北西方向に大きく外れる位置にあり、埋蔵施設その他の遺構に伴う状況とは認定できない。直刃鎌、短冊形鉄斧を含むことから集成4期後半に該当すると考えられる（南毛古墳文化研究会2001、太田・松本2005）。

下野堂10号墓（辺24m）では、周堀の立ち上り部から石剣が出土している。碧玉製とされ、埋蔵施設に伴う状況では確認されていないが、型的には古墳副葬品のうちに見られる石剣と同形の資料である（並木1976）。

林10号墳、同20号墳は、1辺30mを超える方墳で、群集墳を主体的に構成するような小型円墳をはるかに凌ぐ規模を有する。また、林13号墳（辺10m）では、木棺直葬と推定される埋葬施設が検出されている。

これらの方墳は、これまで「方形周溝墓」として一括される場合が多かった。しかし、最近の調査の結果、円墳とされてきた本庄市北堀前山2号墳が、一辺25m方墳である事実が確認されたこと、万年寺つつじ山古墳・下野堂10号墓などに見るように方墳の副葬遺物に古墳副葬品と同様の品目が含まれていること、さらに古墳時代前・中期の小型方墳群が各地に確認できることなどから、旭・小島古墳群の方形墳墓についても古墳とすることが妥当である。

万年寺八幡山古墳（径43m）は、埋葬施設に箱式石棺を有することが知られていたが、近年の確認調査で石棺内から鉄剣2本が出土した。この箱式石棺は墳丘中心を大きくはずれる位置にあることから、同墳には墳丘中央部に未確認の中心埋葬施設が存在すると考えられる。埴輪を伴わず、数次の周堀調査によっても土器類を検出できていないため築造時期の詳細は不明で、集成4期に遡る可能性も考えられる（南毛古墳文化研究会2001）。南東側の万年寺つつじ山古墳とは相互の墳丘が近接することから、周堀の重複が予想されるが、遺構上での前後関係は判明していない。

集成5・6期に属する古墳は少ない。林8号墳（径30m）のように埴輪をもたず、和泉式の土師器をわずかに出土する古墳がみられる。当該期の児玉地域の首長墓は、本庄市公卿塚古墳（径65m）、同金鑽神社古墳（径68m）、同生野山將軍塚古墳（径60m）、美里町志渡川古墳（径40m）などの大・中型円墳の存在が目立つが、現状において旭・小島古墳群にはこれらに匹敵する中期の有力古墳が認められない。また、上記の諸古墳にはすでに埴輪の樹立も認められるが、旭・小島古墳群では埴輪の導入も他に遅れるようである。

集成7期には群集墳の築造が開始され、埴輪も導入される。三志山2号墳（径43m）では、外面二次調整B種ヨコハケの円筒埴輪に和泉式後半期の土師器内斜口縁杯が共伴する。また、上原原5号墳

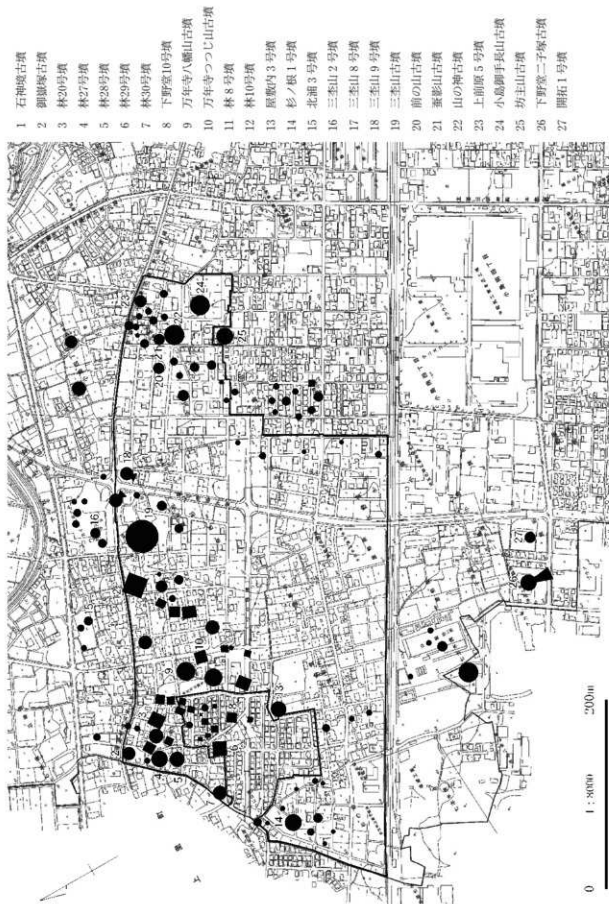


図3 旭・小島古墳分布図

(径26m)でも外面二次調整B種ヨコハケの円筒埴輪を備えることが判明しており、東群の形成も集成7期には確実に始まっている。円筒埴輪は二条突帯三段構成の小型品で、半円形の透孔をもつ。家、人物、馬などの形象埴輪は確認できない。北浦3号墳は埴輪をもたないが、出土した直立口縁をもつ土師器坏は、典型的な坏蓋模倣坏出現以前の型式で、和泉期後半段階に該当し、築造時期は集成7期に遡る。さらに、出土遺物がなく所属年代を確定できない小型円墳の中にも、当該期の築造と推測される事例が含まれる。

集成8期においても群集墳の造営は継続し、三奈山8号墳(規模不詳)では円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに家、女子人物、男子武装人物、盾持人物、馬など豊富な形象埴輪が加わっている。武装人物は、埼玉稲荷山古墳出土例に酷似した肩庇付冑の表現があり、注目される。この集成8期前後には、三奈山7号墳(29m)などの帆立貝式古墳が築かれ、またこれを中核として、その周囲に、低平な墳丘をもち、堅穴系埋葬施設を備える小規模な円墳が数多く築造されるようになり、前段階からの連続的な造営を認めることができる。

集成7・8期において活発な群集墳の造営は、つぎの集成9期に入ると一時的に停滞するようで、旭・小島古墳群では、いまのところ集成9期の古墳はみあたらない。

これに対し、集成10期になると古墳の造営はふたたび活発化し、とくに東群には大型の円墳が集中するようになる。小島御手長山古墳(径42m)はそれらの中で最大の規模を有し、角閃石安山岩を用いた横穴式石室が検出されている。副葬品に挂甲、直刀、鉄鏃、馬具などがあり、埴輪は円筒、朝顔、家、人物、大型の馬などが出土している。隣接する坊主山古墳(径35m)、山の神古墳(径40m±)、蛭影山古墳(径25m)、前の山古墳(径30m±)なども、埋葬施設に横穴式石室を備え埴輪を樹立する古墳で、築造時期はいずれも集成10期段階に降ると考えられる。坊主山古墳では、かつて直刀、刀装具、鉄鏃、玉類が出土したことがあり、前の山古墳でも耳環、ガラス玉を検出している。山の神古墳、蛭影山古墳、前の山古墳では段築、墓石の存在が確認されている。

いっぽう、西群の上里町側にも神保原浅間山古墳(径30m)があり、横穴式石室からは直刀、鉄鏃、耳環、玉類のほか銅鏡1点が出土している。同じく西群の南端部に位置する下野堂二子山古墳は旭・小島古墳群中で唯一の前方後円墳である。墳丘はすでに削平を受け、段築・墓石・埋葬施設などの状況は不明であるが、航空写真・地籍図の分析から全長60m前後の規模と推定される。試掘調査では年代を示す資料を得られていないものの、埴輪をもたないことから集成10期後半の築造が考えられている。

終末期には、下野堂開拓1号墳(径22m)、下野堂御手長山古墳(径22m)、堂場地区に集中する堂場1～9号墳など、不整形の周堀をめぐらす直径10～20m前半の円墳が知られる。下野堂開拓1号墳(径22m)は石室攪乱層からは鉄製の鉤具、刀子、釘が出土し、石室前庭部から大量の土師器・須恵器片のほか青銅製の巡方3点、丸柄2点が出土されている。堂場1～9号墳では7世紀前半から後半までの土器が共存しており長期間の追葬が想定される。これら終末期の古墳は、北側の台地縁辺から離れ、群の南寄りに分布する傾向が認められる。とくにJR高崎線以南に分布展開する古墳は、下野堂二子山古墳を除き、すべて終末期の古墳であり、この時期、群の中央に伸びる埋没谷の奥部に新たな墓域を展開していることがわかる。なお、終末期には首長墳として方墳を採用する地域もあるが、旭・小島古墳群の中には、いまのところ確認できない。

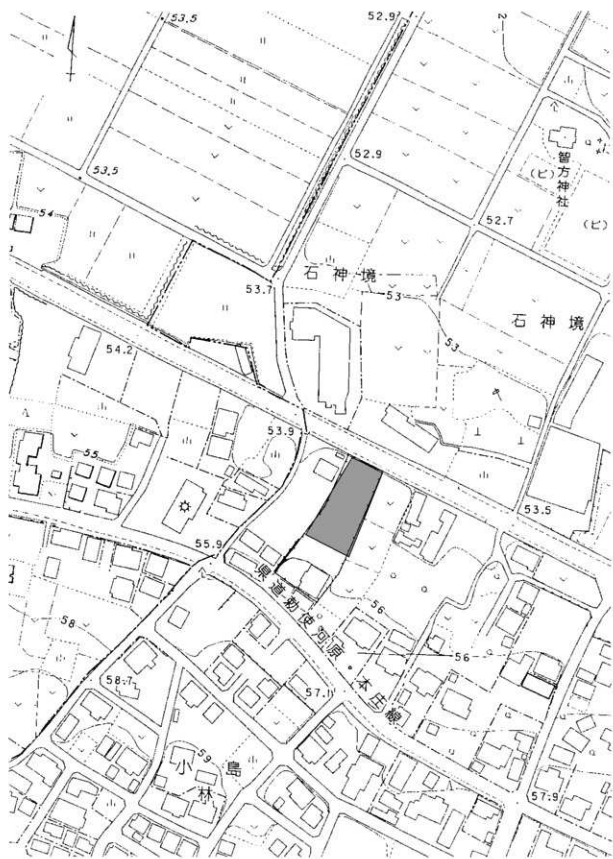


図4 調査区位置図

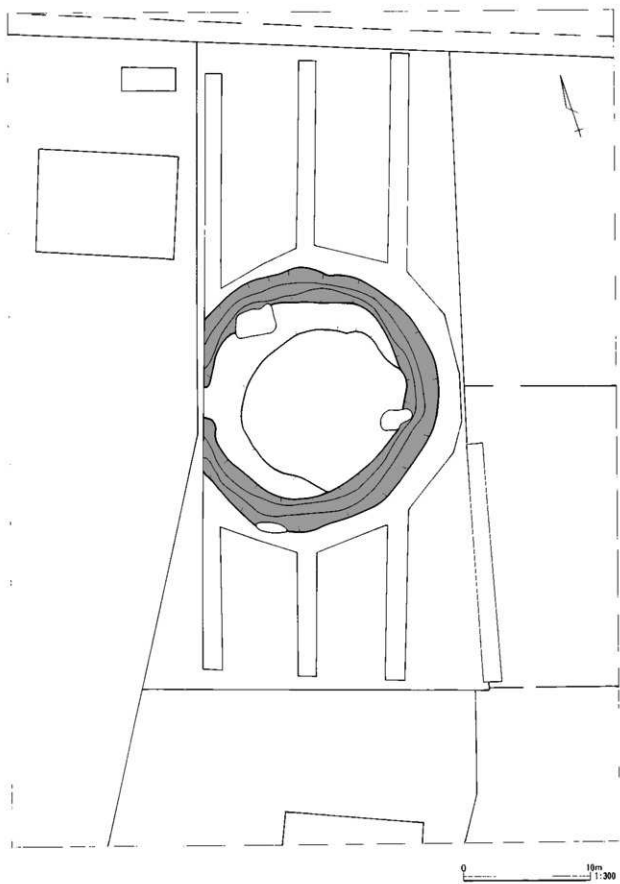


图5 調査区全体図

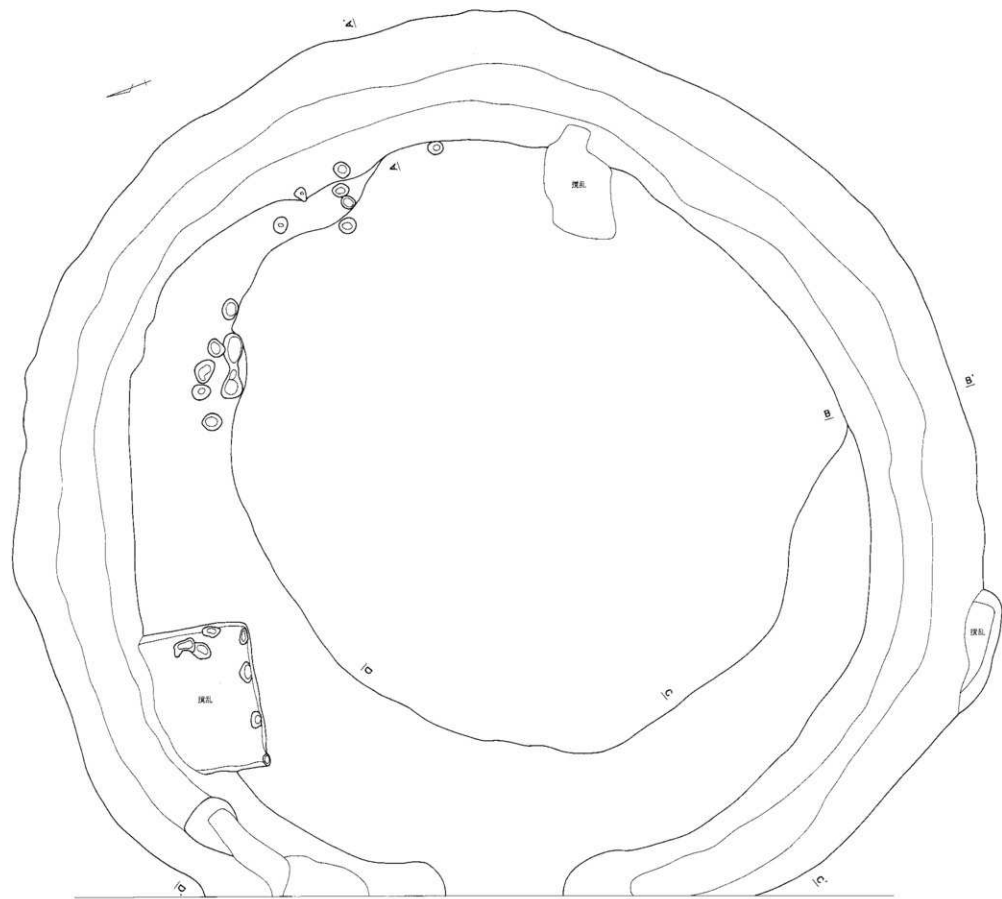


图6 石神塚古墳全体図

0 2 m
1:50

III 調査の成果

1 遺構

石神境古墳は西側に陸橋状施設を有する円墳である。墳丘規模は直径調査区のほぼ中央に位置し、西側の一部は調査区外にある。

遺構確認面はローム層の上面である。調査着手前は一部が畑地として利用されていたが、遺構確認面までが浅く、一部では耕作土がローム層の上面を直接被覆している状態であった。このため、墳丘盛土は完全に消滅し、盛土下の旧表土層も失われている。埋葬施設も検出されなかった。

墳丘部は、北西側の一箇所が、攪乱を受けている以外は、平面形状を良好にとどめている。墳丘縁辺部には南東側の一部を除き、ローム層を削り出して緩斜面を形成し、テラス状の施設を設けている。

墳丘西側の陸橋状施設は、確認面で幅2.4mを図る。外側が調査区外にあるため全体の形状は不明であるが、陸橋状施設に接する南北の周堀の形状を観察すると、帆立貝形古墳の突出部のように狭い周堀が外側に回り込むような設計にはならないようである。また、周囲の堀幅からして遺出し状になるとは考えられず、この部分で単純に周堀が途切れると推定されたことから陸橋状施設と判断したものである。

周堀は東から南東側にかけてが広く、上幅で2.8m前後を測り、そのほかでは上幅で2.4m前後で一定しているが、西側の陸橋状施設付近ではやや狭くなっている。立ち上がりは内外ともに直線的で、断面形は逆台形を呈する。墳丘縁辺部のテラス状施設との境界には線縁を形成し、明瞭に傾斜を交換している。周堀底は全体に平坦で、段差や土坑状の落ち込みは検出されていない。一部に攪乱が入る以外は、周堀の内外に接する土坑も認められず、副次的な埋蔵施設は存在しないようである。

2 遺物

出土した遺物はすべて埴輪で、器種に円筒・朝顔形・家・人物が認められる。土師器・須恵器は出土していない。

埴輪の出土状況は図8に示したとおりである。墳丘外縁のテラス状施設から周堀内部にかけて散在している。確実に樹立状態で検出された個体は認められないが、弧を描くようにして並ぶ円筒埴輪16・20・21・23・25・28は、ある程度原位置を反映している可能性がある。形象埴輪は西側の陸橋状施設を挟んで、南側に家形埴輪2点、北側に男子人物埴輪1点、女子人物埴輪2点が検出されている。明らかに陸橋状施設を意識した配置であることがわかる。いずれも樹立原位置から周堀に向かって転落した状態で出土しており、円筒埴輪との配置関係は明瞭ではない。いずれの遺存状態も良好とはいえず、とくに3点の人物埴輪は胴部下半から台部にかけての破片が全く検出されていない。重量のある頭部から腕部、胴部上半が先行して破損・転落し、原位置にあった胴部から台部にかけては、墳丘とともに削平を受けたことが推定される。

円筒埴輪 [1~82] (図9~17、写真8~15)

すべて2条突帯3段構成品で占められている。外面調整は一次タテハケのみで、二次調整が加えられない個体は含まれない。

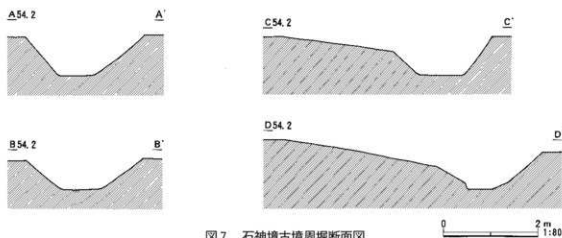


図7 石神境古墳周塙断面図

突帯は全体にやや貧弱で、断面が三角形の個体が目立つ。透孔の形態は、半円形が大半であるが、4のように円形と判断される個体もわずかながら認められる。上位の突帯に接するような位置に穿孔される例が多い。

外面調整は一次タテハケのみで、二次調整が加えられる個体は含まれない。実測資料の1・15・21~23、拓本資料の74・78・81など、底部外面に板押圧による底部調整の観察される個体が多い。内面調整は第1・2段が縦位または斜位のナデ、第3段には斜位のハケを観察する個体が多い。

刻線はすべて「×」形で、2・4・6・では第3段外面、20・24では第2段外面に観察される。14の第3段には小穿孔の存在した可能性がある。

胎土にはほとんどすべての個体に片岩・チャートを含む。焼成は全体に良好である。色調は橙色(5YR6/6~5YR8/8)を示す個体が多数を占め、一部に明赤褐色(2.5YR5/6または5YR6/6)を呈する個体が見られる。

朝顔形埴輪 [83] (図17、写真15)

確認できる朝顔形埴輪は83の1点のみである。このほか胴部片のなかに朝顔形埴輪が含まれる可能性はある。大きく外彎する口縁部の破片で、内外面ともにやや粗いナデが施されている。胎土に片岩・チャートを含み、焼成はやや軟質で、色調は橙色(5YR6/8)を示す。

形象埴輪 [1~5] (図18~26、写真16~20)

家 [1・2]

1・2ともに入母屋式の家である。1は壁の大半を失っているものの、屋根部はおおよその形状を残している。壁は片面の平側が残存するのみで詳細は不明である。基部はすべて失われており、形状を知る手掛かりを欠く。また、壁体部の四隅も残っていないため、柱の表現も明らかではない。

壁体部の成形は粘土紐の積み上げにより、内面には粘土紐の接合痕が観察される箇所がある。壁体部表面は無文で、杉綾などの刻線やヘラ描き線は認められず、突帯表現もない。一方の平側の中央やや右より、長方形の孔があり、出入口を表現している。扉の造形はとくに確認されない。屋根部との接合はいわゆる「一括成形技法」(青柳1996)で、壁体部の上端に屋根の下端を乗せて接合し、両者の接合部に粘土紐を貼付して屋根の軒先部分を成形している。

屋根部は上半部と下半部の平側の境界に粘土紐を貼付し、さらにこの粘土紐上のそれぞれ3箇所に円形の粘土板を付け加えている。屋根下半部の成形は、壁体部と同様に粘土紐の積み上げにより、一

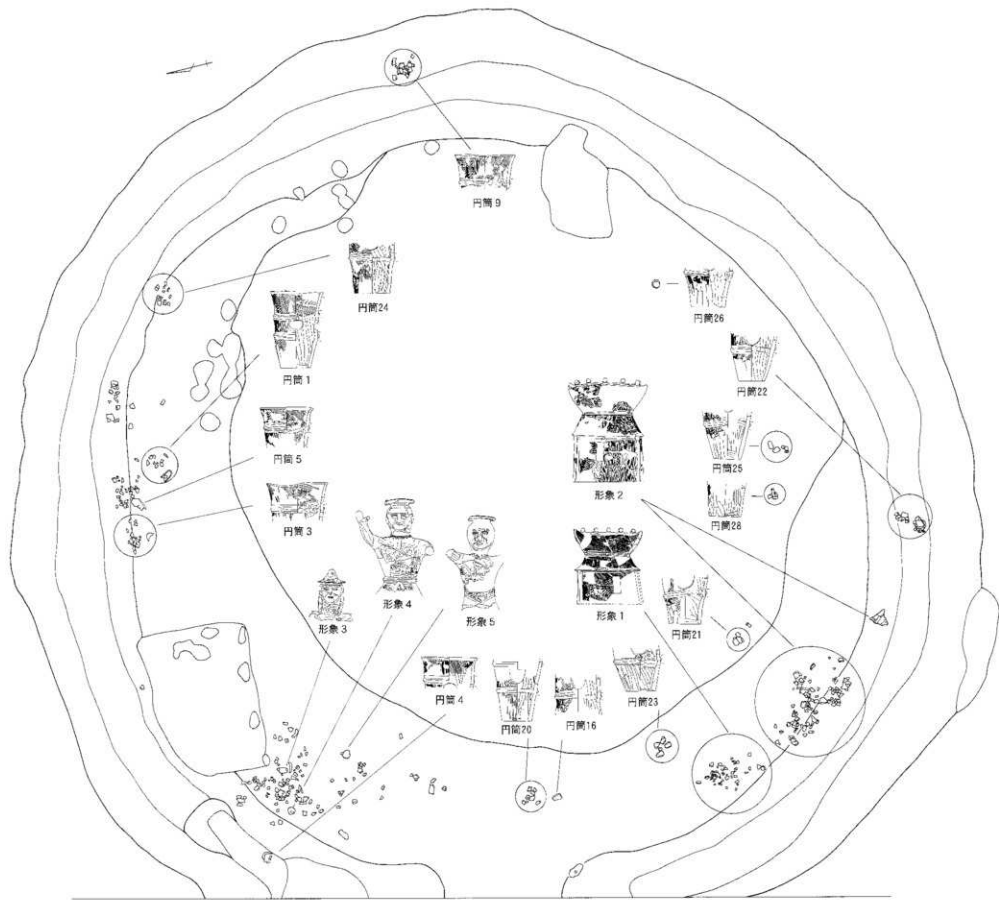


図 8 石神塚古墳埴輪出土状況図

0 2m
1:80

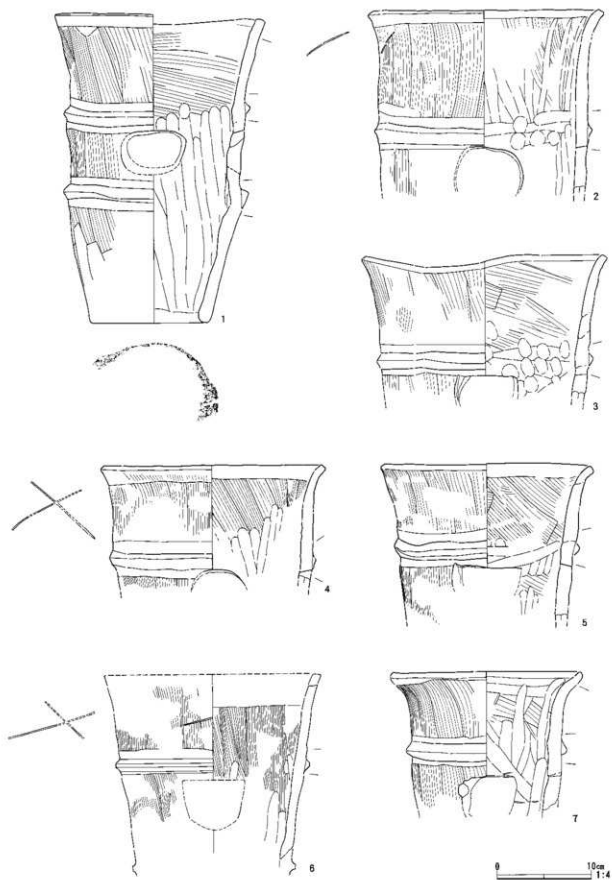


图9 石神境古墳出土土甎筒埴輪実測図(1)

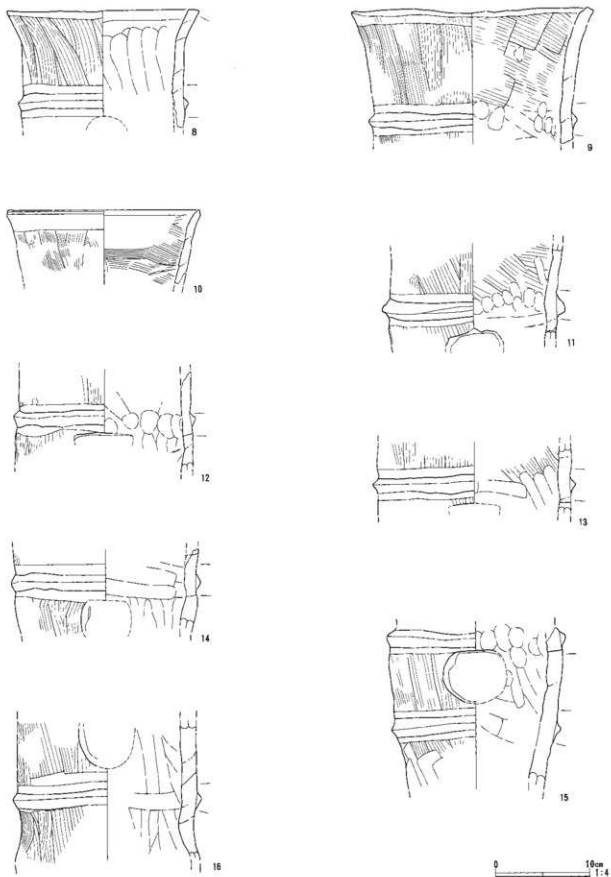


图10 石神境古墳出土土円筒埴輪実測図②

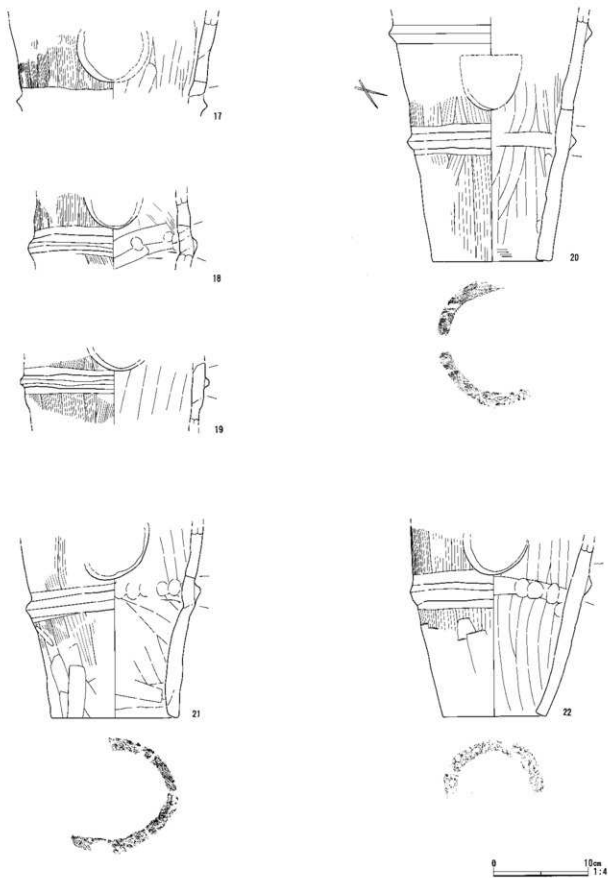


图11 石神境古墳出土土丹筒埴輪突測図(3)

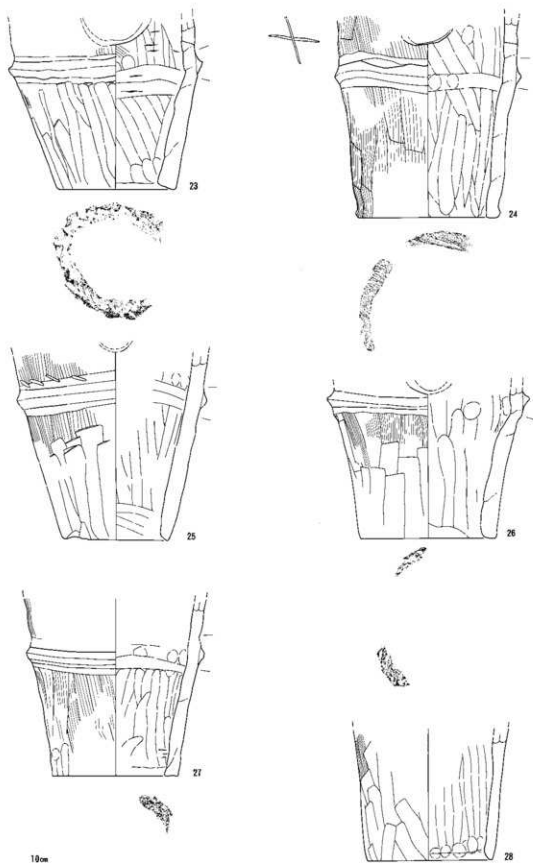


图12 石神境古墳出土土円筒輪軸突測図(4)

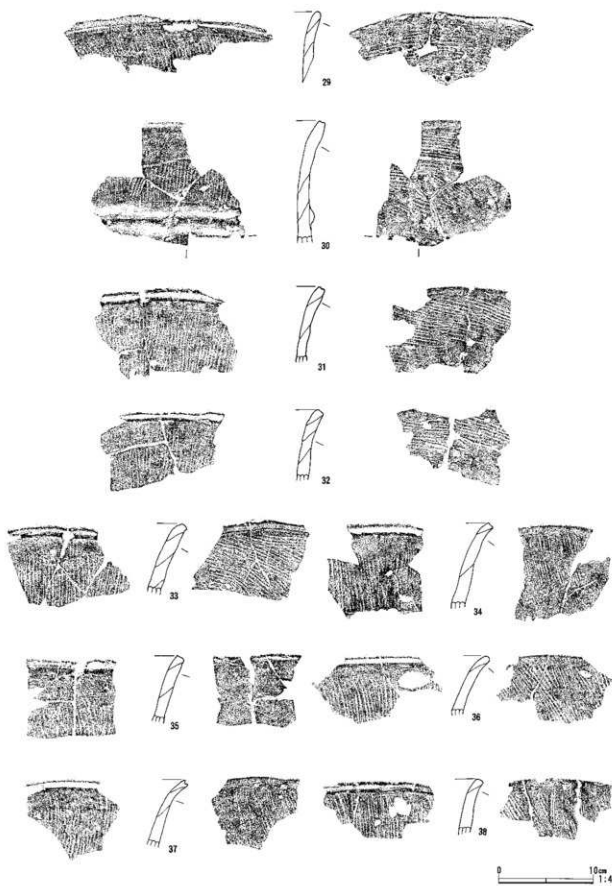


图13 石神境古墳出土土円筒紡輪實測図(5)

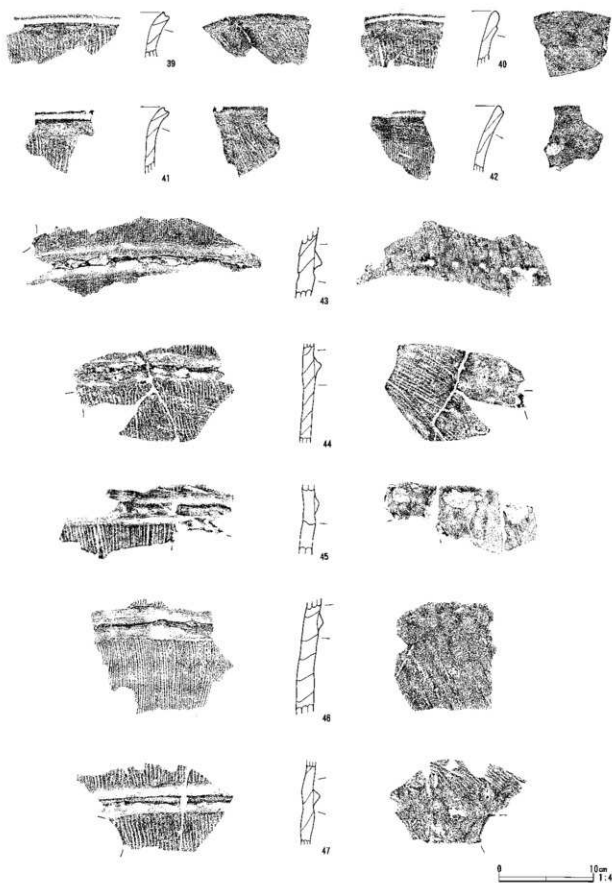


图14 石神境古墳出土土円筒輪軸実測図⑥

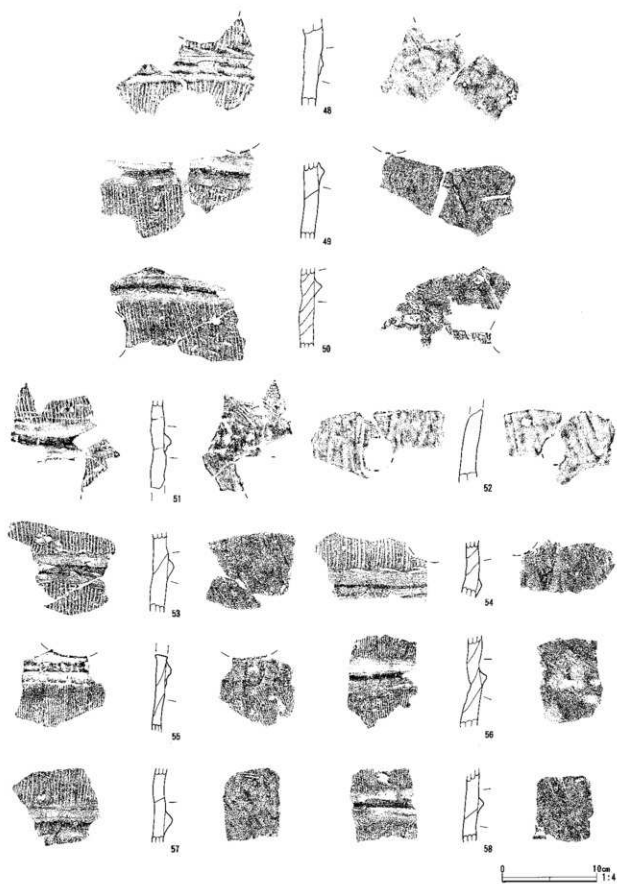


图15 石神境古墳出土土円筒埴輪実測図(7)

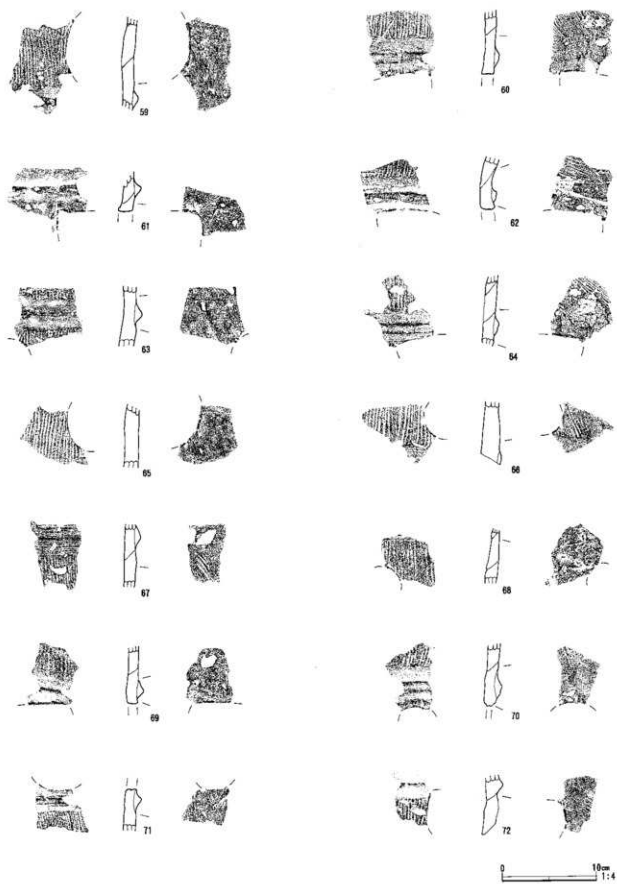


图16 石神境古墳出土土円筒埴輪実測図(8)

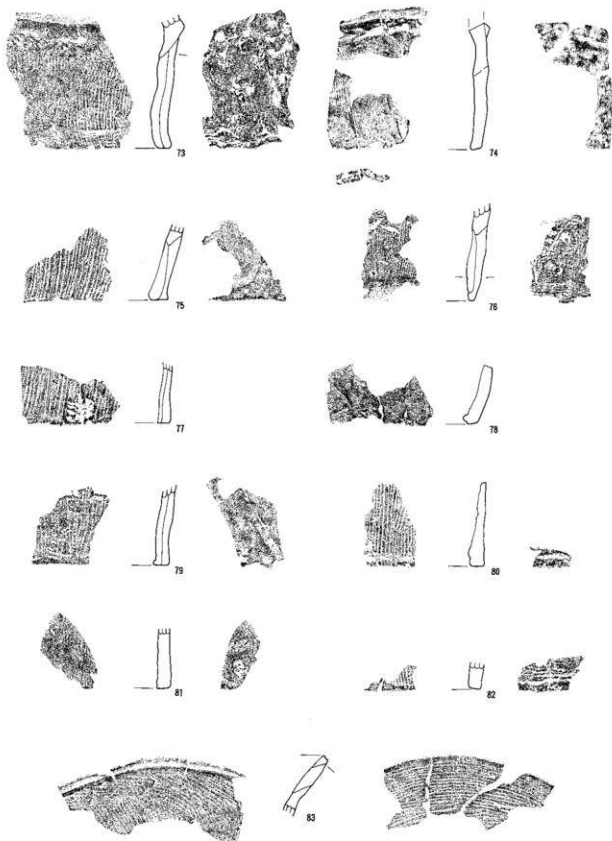


圖17 石神境古墳出土土甎・朝顔形埴輪実測図(9)

石神塚古墳 円筒埴輪観察表

No.	法量 (cm)			突帯 (cm)		透孔 (cm)		形態・調整等の特徴	ハケ本数 (\times 2cm)	色調	備考
	器高	口径 器高	底径	幅	高さ	形状	孔径				
1	32.7	22.2 (12.3)	(14.9 ②8.4 ③10.3)	1.8	0.7	平円	\times 0.7	外面 タテハケ。板押圧による底部調整。 内面 第1・2段はタテ指ナズ、第3段ナメハケ。	外：5 内：5	棕色 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
2	—	(24.9)	①— ②— ③12.7	2.1	0.5	(円)	—	外面 タテハケ、口縁部ココナズ。 内面 ナメハケ後、タテ・ヨコ指ナズ・指面正直。	外：5~6 内：6	棕色 5YR6/6	外面第3段に縦刻「 \times 」か。片岩・チャート含む。
3	—	(26.0)	①— ②— ③11.0	1.7	0.4	平円	\times 6.7	外面 タテハケ。 内面 ナズ・指面正直。第3段ナメハケ。	外：5~6 内：5	棕色 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
4	—	23.7	①— ②— ③10.2	2.1	0.4	円	—	外面 ナメハケ後、タテ指ナズ。 内面 口縁部ココナズ。	外：5~9 内：6~7	棕色 5YR6/6	外面第3段に縦刻「 \times 」。片岩・粗粒チャート含む。
5	—	22.5	①— ②— ③8.8	2.1	0.6	平円	\times 7.3	外面 タテハケ、口縁部ココナズ。 内面 ナメハケ後、タテ・ヨコ指ナズ。	外：5~8 内：5~9	棕色 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
6	—	—	—	1.3	0.5	(平円)	—	外面 タテハケ。 内面 タテハケ後、第2段以下タテ指ナズ、口縁部ココナズ。	外：9~10 内：11~12	棕色 5YR8/8	第3段外面に縦刻「 \times 」か。片岩・チャート含む。
7	—	(20.4)	①— ②— ③8.3	2.0	0.7	平円	—	外面 タテハケ。 内面 ナメハケ後、タテ・ナメ指ナズ。	外：5~6 内：5~6	棕色 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
8	—	(20.4)	①— ②— ③9.8	1.7	0.5	(円)	—	外面 タテハケ。 内面 タテ指ナズ。	外：5	棕色 5YR6/8	片岩・粗粒チャート含む。
9	—	(25.6)	①— ②— ③11.8	1.9	0.6	—	—	外面 タテハケ、口縁部ココナズ。 内面 ナズ・指面正直。第3段ナメハケ。	外：6~10 内：5~7	明赤褐色 5YR5/6	片岩・チャート含む。
10	—	(24.0)	—	—	—	—	—	外面 タテハケ、口縁部ココナズ。 内面 ナメハケ後に一部ナズ。	外：10 内：9	棕色 5YR6/6	片岩・チャート含む。
11	—	—	—	2.9	0.9	(平円)	—	外面 タテハケ。 内面 指面正直・ナズ。第3段はナメハケ。	外：5~6 内：5	棕色 2.5YR6/8	片岩・粗粒チャート含む。
12	—	—	—	1.7	0.5	平円	—	外面 タテハケ。 内面 ナズ・指面正直。	外：5	棕色 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
13	—	—	—	2.0	0.6	(平円)	—	外面 タテハケ。 内面 ナメハケ後、ヨコ・ナメナズ。	外：5 内：5	棕色 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
14	—	—	—	1.9	0.5	(平円)	—	外面 タテハケ。 内面 第2段タテ指ナズ、第3段ヨコ指ナズ。	外：6	棕色 5YR6/6	第3段下位に小穿孔の可能性あり。片岩・粗粒チャート含む。
15	①—	②9.8	③—	2.6	0.6	平円	—	外面 タテハケ。板押圧による底部調整。 内面 指ナズ・指面正直。	外：5	棕色 5YR6/8	片岩・粗粒チャート含む。
16	—	—	—	2.0	0.5	不明	—	外面 タテハケ。 内面 タテ・ナメ・ヨコ指ナズ。	外：5	棕色 5YR7/8	片岩・粗粒チャート含む。
17	—	—	—	—	—	不明	—	外面 タテハケ。 内面 タテ指ナズ。	外：9~10	棕色 5YR6/8	片岩・粗粒チャート含む。
18	—	—	—	1.7	0.5	不明	—	外面 タテハケ。 内面 ナメハケ後、ナズ・指面正直。	外：9~10	棕色 5YR6/6	片岩・チャート含む。
19	—	—	—	1.4	0.5	不明	—	外面 タテハケ。 内面 タテ指ナズ。	外：9~10	棕色 5YR6/6	片岩・チャート含む。
20	—	—	12.1 ①12.5 ②(11.4) ③—	2.1	0.6	平円	—	外面 タテハケ。 内面 タテ・ヨコ指ナズ。	外：5	明赤褐色 5YR5/6	外面第2段に縦刻「 \times 」。片岩・粗粒チャート含む。
21	—	—	(13.3) ①13.7 ②— ③—	2.3	0.7	不明	—	外面 タテハケ。板押圧による底部調整。 内面 ナズ・指面正直。	外：5	棕色 5YR6/8	片岩・粗粒チャート含む。

22	— — (10.9) ⑬13.8 ②— ③—	2.1	0.5	不明	—	外面 タテハケ。板押圧による底 部調整。 内面 タテ指ナデ、ココナデ・指 組圧風。	外：5	橙色 5YR6/6	片岩・粗粒チャート含む。
23	— — — ⑬13.4 ②— ③—	2.6	0.7	不明	—	外面 タテハケ。新統ナデによる 突帯貼付。板押圧による底 部調整後、部分的に強いタ テ指ナデ。 内面 ナナメハケ後、タテ・ココ 指ナデ、指組圧風。	外：5	橙色 5YR6/8	片岩・粗粒チャート含む。
24	— — 14.4 ⑬14.9 ②— ③—	2.0	0.5	不明	—	外面 タテハケ。 内面 タテ・ナナメ・ココ方向の 指ナデ。	外：5～6	橙色 2.5YR6/6	外面第2段に緑黒「×」 片岩・粗粒チャート含む。
25	— — 11.2 ⑬14.7 ②— ③—	2.2	0.5	不明	—	外面 タテハケ。新統ナデによる 突帯貼付。板押圧による底 部調整。 内面 タテ・ココナデ、指組圧風。	外：5	明赤褐色 2.5YR5/6	片岩・チャート含む。
26	— — (14.2) ⑬14.8 ②— ③—	1.8	0.7	不明	—	外面 タテハケ。板押圧による底 部調整。 内面 ハケ後、タテ指ナデ・指組 圧風。	外：9～10	橙色 5YR6/6	片岩・チャート含む。
27	— — (13.1) ⑬13.0 ②— ③—	2.3	0.5	—	—	外面 タテハケ。 内面 タテ・ココ指ナデ、指組圧 風。	外：5	橙色 5YR6/6	片岩・チャート含む。
28	— — — — — —	—	—	—	—	外面 タテハケ。板押圧による底 部調整。 内面 タテ指ナデ、底部に指組圧 風。	外：8	橙色 5YR6/6	片岩・チャート含む。

部に粘土紐の接合痕が認められる。屋根上半部は左右の妻部を大きく広げることで、破風を表現している。妻側は大きく開口し、棟木や斗束の表現はない。

棟の上面には2条の粘土紐を貼付し、これと直交するように堅魚木を乗せている。堅魚木は中実成形で、2個を残すのみであるが、原状は5個存在したものと推定される。

調整は外面のうち壁体部が縦位および斜位のハケ、屋根下半部が縦位のハケ、屋根上半部が斜位および横位のハケで、内面には全体に縦位および斜位のナデが施されているが、屋根上半部の一部に斜位のハケが認められる。胎土に片岩・チャートを含み、焼成は全体に良好で、色調は橙色(5YR6/8)を示す。

2は壁体部から屋根下半部にかけての半分程度が残り、屋根上半部は大半を失っている。四壁と屋根下半部は、外側へ緩やかに膨らんで、平面形は全体に隅丸の方形を呈する。

壁体部の成形は、1と同様に、粘土紐の積み上げによるようで、内面にはわずかに粘土紐の接合痕がわずかに観察される。基部には粘土帯を加えない。壁体部の四隅に縦位の突帯を貼付し、柱を表現している。壁体部表面は無文で、杉綾などの刻線やヘラ描き線は認められず、突帯表現もない。両方の平側の中央やや左よりに、それぞれ長方形の孔があり、出入口を表現している。扉の造形はとくに確認されない。また、妻側の一方には円形の透孔が配されている。反対側の妻部は失われているが、こちら側にも同様の透孔が、対を成して配されていたものと推測される。屋根部との接合は、「一括成形技法」で、壁体部の上端に屋根の下端を乗せて接合し、両者の接合部に粘土紐を貼付して屋根の軒先部分を成形している。

屋根部は上半部と下半部の平側の境界に粘土紐を貼付しているが、1とは異なり、粘土紐上には円形粘土板が表現されていない。屋根下半部の成形は、壁体部と同様に粘土紐の積み上げにより、一部に粘土紐の接合痕が認められる。屋根上半部の形状を知る手掛かりはほとんどないが、わずかに残る

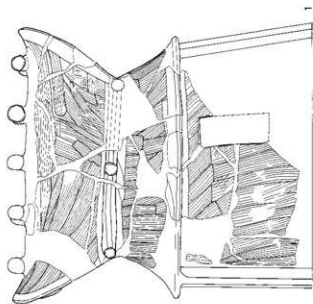
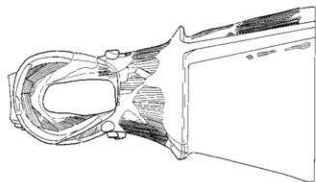
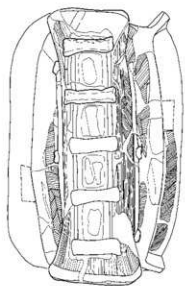


图18 石神塚古墳出土形象埴輪(実測図1)

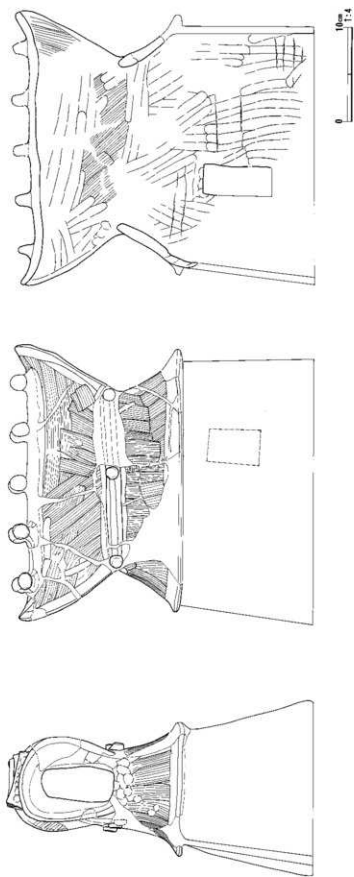


图19 石神塚古墳出土形象銅輪美濃図2

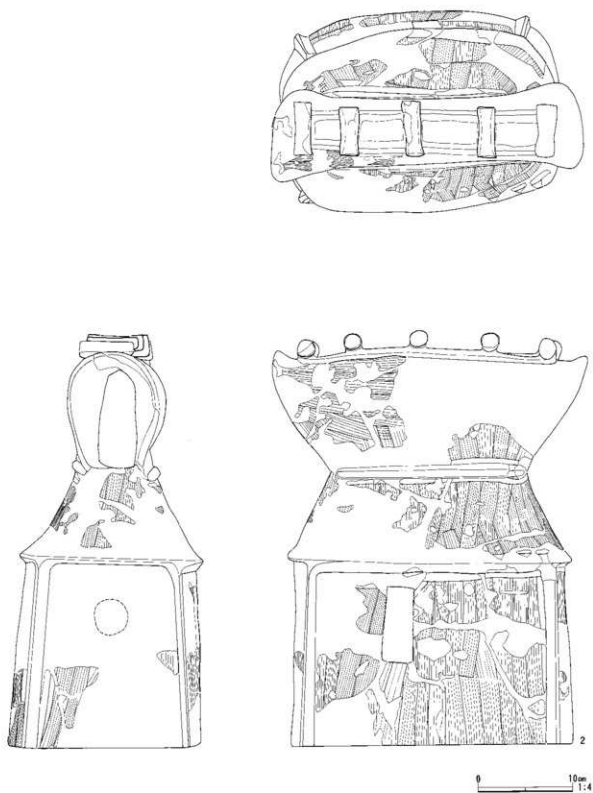


图20 石神境古墳出土形象埴輪実測図③

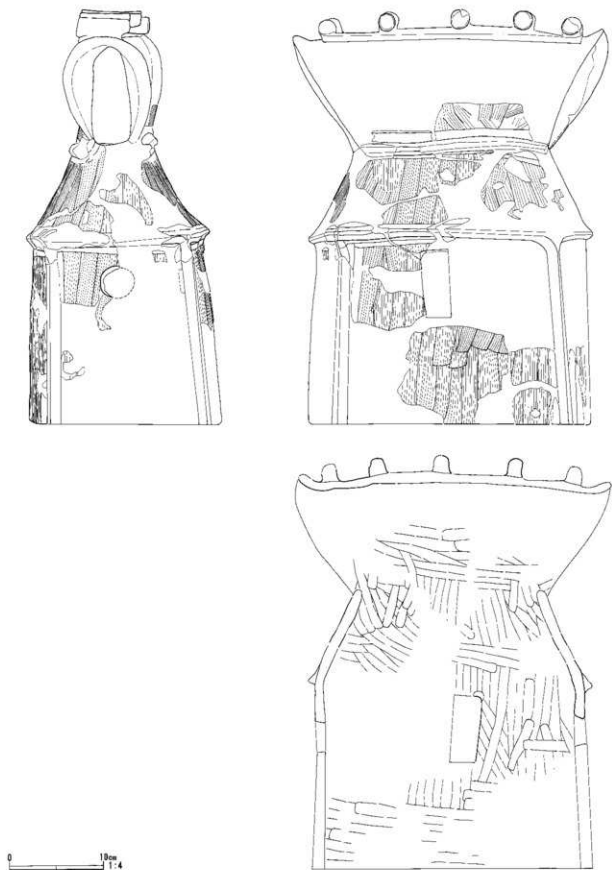


图21 石神境古墳出土土形象埴輪実測図(4)

破片から、左右の妻部を大きく広げ、破風を表現したらしいことが窺える。

棟の上面には堅魚木を乗せていたらしく、2の棟から脱落したと推定される堅魚木が4個検出されている。いずれも中実成形である。1と同じく、原状は5個存在したものと考えられる。

調整は外面のうち壁体部から屋根下半部にかけてが縦位のハケ、屋根上半部が斜位および横位のハケで、内面には全体に縦位および斜位のナデが施されている。胎土に片岩・チャートを含み、焼成は全体に良好で、色調は橙色(5YR6/8)を示す。

人物〔3～5〕

1は頭に笠状の被りものを着け、下げ美豆良を結う男子である。胴部上半以下を失い、両腕も脱落しているが、頸部から当部にかけては比較的良好に遺存している。頭部に着ける笠状の被りものは、頭頂へ向かって高く突出し、先端は丸く成形されている。頭部本体を閉塞しない状態で、被りものを接合したのち、頭部と被りものの境界付近に、環状の粘土板を貼付して、被りものの鐫の部分表現している。両側頭に、先端がT字状をなす下げ美豆良を表現している。また、後頭部には背中まで延びる垂髪が見られる。眉と鼻は粘土紐を貼付して立体的に表現しているが、両者の境界は明瞭ではなくT字状に連続した状態となっている。左右とも耳朶や耳孔の表現はない。顔面には目と口の中間に「ハ」字状の刻線が入る。頸部には粘土円板を連続的に貼付して首飾りを表している。肩部は左右の造形が微妙に異なり、腕の所作は左右で異なっていた可能性がある。なお、残っている肩部の状態から、胴部の造形は中空成形ではないと判断される。

調整は、外面が粗いハケののちナデ、内面は観察不能な頭部上半以外はすべてナデである。胎土に片岩・チャートを含み、焼成は全体に良好で、色調は明褐色(7.5YR5/6)を示す。

4は右腕をあげる姿態の女子である。頭部から腰付近にかけての一部が残る。髪形は鼓形を呈する板状の髻を頭頂部に載せている。眉と鼻は粘土紐を貼付して立体的に表現している。鼻は脱落しているが、両者の境界は明瞭ではなくT字状に連続した状態となっている。顔面には刻線などによる装飾は見られない。頸部には細い粘土紐をまわし、粘土紐の下に粘土粒を連続的に貼付して首飾りを表している。左腕は上腕部から先が失われているが、右腕は手首付近までが残る。中実成形で、肩部との接合はソケット式である。胸部には左右に円錐状粘土を貼付して乳房の存在を表現する。腰には突帯状の粘土紐をまわして帯を表し、正面に結び目を表現している。

調整は、外面が粗いハケののちナデ、内面はすべてナデである。胎土に片岩・チャートを含み、焼成は全体に良好で、色調は橙色(5YR6/6)を示す。

5も4と同様に右腕をあげる姿態の女子である。顔面の中央部分と、頸から胴にかけての一部が残る。眉と鼻は粘土紐を貼付して立体的に表現しているが、両者の境界は明瞭ではなくT字状に連続した状態となっている。顔面には眼下から口の両脇にかけての左右それぞれに、縦位の2条斜位1条の刻線が入る。頸部には粘土円板を連続的に貼付して首飾りを表している。腕は中実成形で、肩部との接合は、ソケット式である。胸部には左右に円錐状粘土を貼付して乳房の存在を表現する。胴部下端には上衣の裾部の表現があったらしく、幅の広い粘土の剝離痕が観察される。

調整は、外面が粗いハケののちナデ、内面はすべてナデである。胎土に片岩・チャートを含み、焼成は全体に良好で、色調は明赤褐色(5YR5/6)を示す。

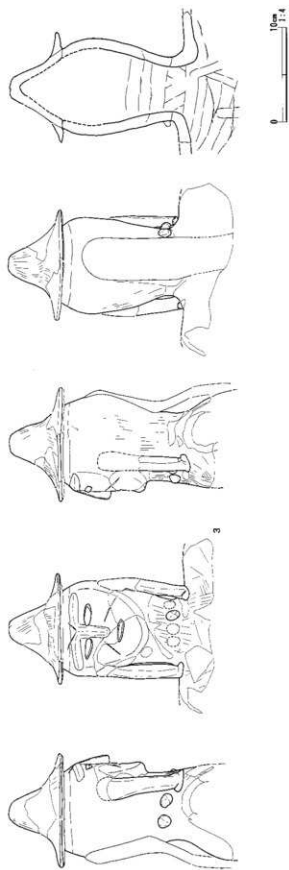


图22 石神境古墳出土形象埴輪実測図5)

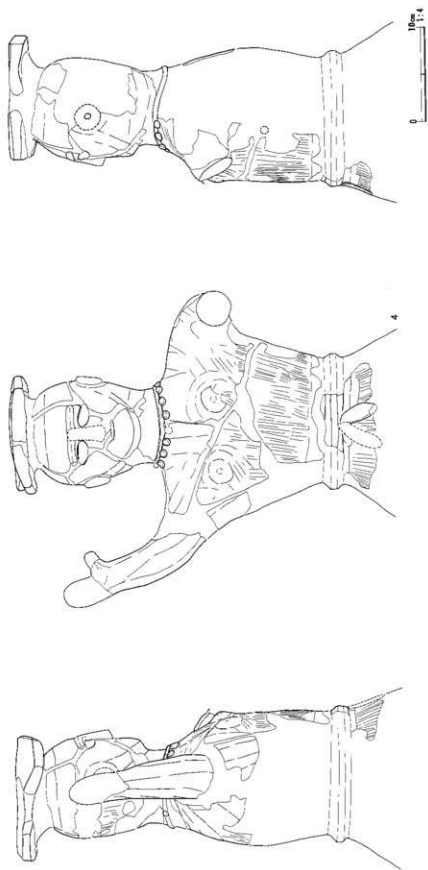


图23 石神境古墳出土形象埴輪実測図⑥

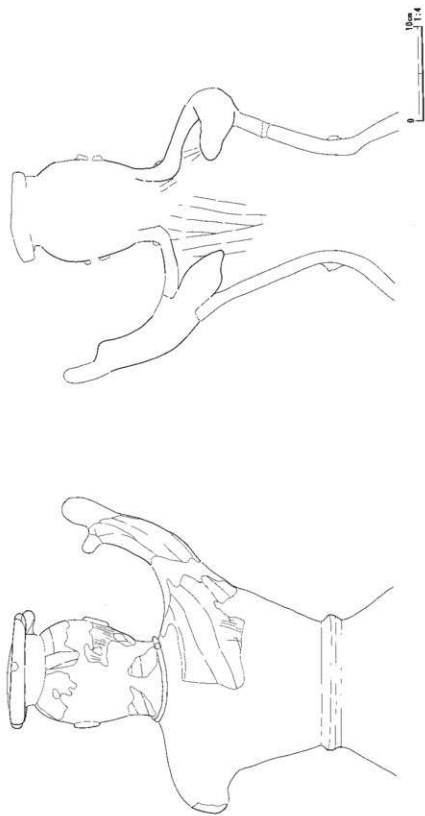


图24 石神境古墳出土形象埴輪実測図7)

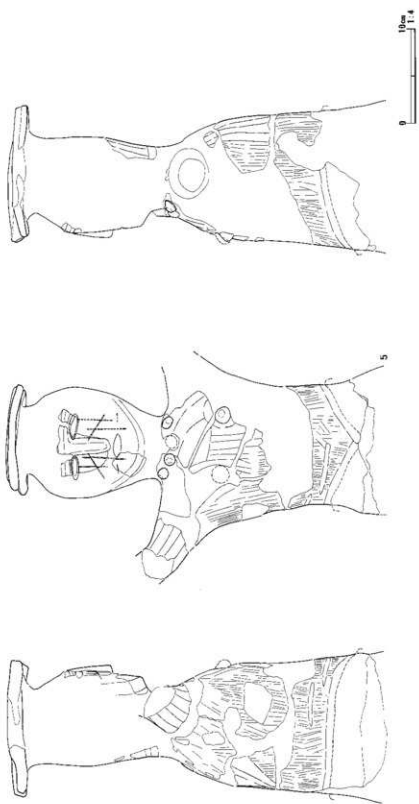


图25 石神境古墳出土形象埴輪美濃図(8)

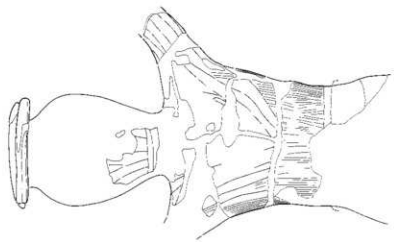
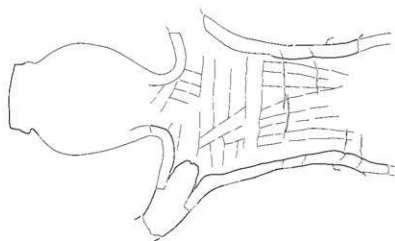


图26 石神塚古墳出土形象埴輪実測図9

IV 結 語

石神境古墳の調査における最大の成果は、古式群集墳を構成する小型円墳における形象埴輪配置を検出したことである。古式群集墳は低平な墳丘と木棺直葬などの簡易な埋葬施設しかもたないことから、完全な削平を受けている事例がほとんどで、埴輪は樹立後の早い段階に墳裾で損壊するか、周堀内部に転落したもののみが残らないことが多い。石神境古墳では幸いにも墳丘外縁部や周堀内から、多くの円筒埴輪とともに家形埴輪2個体、人物埴輪3個体が検出された。

石神境古墳での形象埴輪配置の特徴は、西側の陸橋部を扶んで、北西側の人物群と対称する南西側の墳丘裾部に家形埴輪が配されていたことであろう。古式群集墳内の小型円墳で家形埴輪片が検出されることはあっても、樹立原位置を推定できる事例は、円筒埴輪や人物・馬形埴輪などと比べると、これまでほとんど知られていないのが実情である。家形埴輪を墳頂部に配する例は、竪穴系埋葬施設を備える古墳の場合は確かに多く、埼玉県内でも朝霞市柁塚古墳の例などがあり(三田2001)、破片資料で出土の場合、原位置を墳頂部に想定しがちである。実際、石神境古墳にしても、墳丘裾部に加え、墳頂部にも家形埴輪が置かれていたかもしれない。しかし、墳丘裾部に家形埴輪を配する例は、横穴式石室を埋葬施設とする新式群集墳ではあるが、熊谷市三ヶ尻林4号墳ですでに知られていた(小久保ほか1980)。古式群集墳においても、墳頂部以外の地点に家形埴輪を配置する場合のあることは、今後の調査の際に留意する必要があるだろう。

ちなみに、墳頂部以外に家形埴輪を配置することは、大型前方後円墳においても見られ、形象埴輪が集中的に配置された埼玉稲荷山古墳の中堤造出しでは、各種人物・動物形埴輪とともに複数型式の家形埴輪が出土している。大阪府今城塚古墳中堤で検出の形象埴輪群も、動物・器財のほか複数型式の家形埴輪を含む構成となっている。人物・動物埴輪のみによって構成される群馬県保渡田八幡山古墳のような事例は、家・器財を伴わないという点において、形象埴輪の組み合わせとして、むしろ簡略型式であるといえるのかもしれない。

石神境古墳の築造時期は、土器類の出土を見ないことから、人物・円筒埴輪から推測を試みるよりない。埼玉県内での人物埴輪の出現は、埼玉市白銀塚山古墳(青木ほか1989)、本庄市生野山9号墳(菅谷1984)が最も古く、その時期は集成7期後半の須恵器 TK208 型式並行期である。ただし、白銀塚山、生野山9号の2古墳は、前者が直径約30m、後者が同じく44mを測るやや大型の円墳で、ともに群集墳内の中核的古墳である。集成7期の段階には小型円墳にも、円筒埴輪を伴う例は見られ、とくに埼玉県北部の見玉地域や群馬県内においては珍しくないが、ただ石神境古墳のような群集墳を主体的に構成する小型円墳で、家・人物・馬形埴輪が一般化するの、いままでのところ集成8期以降のことと考えられる。一方、外面に二次調整を欠き、半円形の透孔をもつ円筒埴輪を主体とする事例は、本庄市西五十子6・7・23号墳など、集成8期の古墳に多く見られる(太田2007)。もともと、主体を占めるほどではないにせよ、半円形透孔そのものは、深谷市白山12号墳(深谷市教育委員会2006)など、集成9期の古墳にもかなり残る。そして、板押圧による底部調整は、集成8期までの円筒埴輪には、認められない要素である。以上、円筒埴輪における半円形透孔と板押圧底部調整の共伴から、石神境古墳の築造時期は、集成9期に求められることになるだろう。

【文 献】

- 青木義徳・山田久久・宮崎由利江・小宮山克己・藤井 浩 1989 『白銀宮腰遺跡発掘調査報告書（第2次）』
浦和市遺跡調査会報告書第123集 浦和市遺跡調査会 浦和
- 青柳泰介 1996 『家形埴輪の製作技法について』『家形はにわ』日本の美術 5 至文堂 東京 pp.85-90
- 稲村 繁 2000 『家形埴輪論』『埴輪研究会誌』第4号 埴輪研究会 佐倉 pp.1-30
- 江原昌俊・大谷 徹 2005 『北武蔵における古墳時代中期群集墓の形成』『考古学ジャーナル』No.528
ニューサイエンス社 東京 pp.16-18
- 太田博之 1991 『本庄遺跡群発掘調査報告書V—公野塚古墳—』本庄市埋蔵文化財調査報告第19集 本庄市
教育委員会 本庄
- 2001 『旭・小島古墳群—前の山古墳—』本庄市埋蔵文化財調査報告第23集 本庄市教育委員会
本庄
- 2004 『旭・小島古墳群—上前原1～3・5～11号墳—』本庄市埋蔵文化財調査報告第27集 本庄
市教育委員会 本庄
- 太田博之・松本 完・的野善行 2006 『旭・小島古墳群—林地区I—』本庄市埋蔵文化財調査報告書第3集
本庄市教育委員会 本庄
- 太田博之・松本 完・的野善行 2006 『塩原屋敷遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第32集 本庄市教育委
員会 本庄
- 太田博之 2007 『武蔵北部の首長墓』『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊15 雄山閣 東京
- 2007 『西五十子古墳群』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集 本庄市教育委員会 本庄
- 2008 『旭・小島古墳群—杉ノ根・屋敷内・三奈山・森西・森ノ下地区—』本庄市埋蔵文化財調査
報告書第11集 本庄市教育委員会 本庄
- 大谷 徹 1998 『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集 財団法人埼玉県埋蔵文化
財調査事業団 大里（埼玉県大里郡）
- 金谷克己 1962 『埴輪の誕生』講談社 東京
- 小林行雄 1960 『埴輪』陶磁全集1 平凡社 東京
- 1974 『埴輪』陶磁大系3 平凡社 東京
- 恋河内昭彦 1996 『第V章まとめ』『辻堂遺跡I—県営水田農業確立排水対策特別事業（やほり川地区）に
伴う辻堂遺跡B地点発掘調査報告書—』児玉町文化財調査報告書第19集 児玉町教育委員
会児玉 pp.63-90
- 小久保 徹・田中英司・利根川章彦・齋持和夫・昼間孝志 1980 『三ヶ尻天王・三ヶ尻林（1）』埼玉県埋
蔵文化財調査事業団報告書第23集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 大里（埼玉県
大里郡）
- 後藤守一 1933 『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』帝室博物館学報 6 帝室博物館 東京
- 1936 『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告』3 群馬県 前橋
- 埼玉県 1982 『下野堂（しものどう）古墳群』『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳 浦
和 pp.674-677
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』浦和
- 埼玉県立本庄高等学校考古学部 1975 『いぶき』8・9合併号 本庄

- 坂本和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪編年の諸問題」『埴輪の変遷—その普遍性と地域性—』北武蔵古代文化研究会 pp.63-69
- 1986 「埼玉における前期古墳の形成」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室 浦和 pp.204-207
- 塩野 博 2004 「埼玉の古墳」さきたま出版会 さいたま
- 菅谷浩之 1976a 「下野堂遺跡」『本州市史』資料編 考古資料 本州市 本庄 pp.59-62
- 1976b 「有勝寺北裏埴輪窯跡」『本州市史』資料編 考古資料 本州市 本庄 pp.100-103
- 1976c 「赤坂埴輪窯跡」『本州市史』資料編 考古資料 本州市 本庄 p.103
- 1984 「北武蔵における古式古墳の成立—児玉地方からみた北武蔵の古式古墳—」『児玉町史資料調査報告 古代第1集 児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会 児玉郡児玉町
- 杉山晋作・太田博之 2005 「関東における古墳時代中期群集墓の墓制変容」『考古学ジャーナル』No.528 ニューサイエンス社 東京 pp.3・4
- 並木 隆 1976 「7 本州市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘報告会発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会 浦和 pp.8・9
- 南毛古墳文化研究会 2001 「本州市域における古式古墳調査の成果と課題」第5回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料 本庄
- 橋本博文・佐々木幹雄ほか 1980 「有勝寺北裏遺跡」有勝寺北裏遺跡調査会 東京
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成畿内編』山川出版社 東京 pp.24-26
- 深谷市教育委員会 2006 「岡部町史 原始・古代資料編」深谷
本州市 1986 『本州市史』通史編Ⅰ 本州市史編集室 本庄
本州市教育委員会 1984 『本庄遺跡群発掘調査報告書』本州市埋蔵文化財調査報告第6集 本州市教育委員会 本庄
- 松本 完 2002 「大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第2次）・北福前山古墳群（第2・3次）発掘調査報告書—新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ—」本州市遺跡調査会報告第6集 本州市遺跡調査会 本庄
- 増田一裕 1989 「旭・小島古墳群発掘調査報告書Ⅱ」本州市埋蔵文化財調査報告第13集 本州市教育委員会 本庄
- 増田精一 1978 『埴輪の古代史』新潮社 東京
- 右島和夫・平野進一・南雲芳昭 1996 『図説はにわの本』東京美術 東京
- 右島和夫 1994 『東国古墳時代の研究』学生社 東京
- 三木文夫 1967 『はにわ』日本の美術19 至文堂 東京
- 三田光明 2001 「埋文さいたま」第37号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 大里（埼玉県大里郡）
- 三輪嘉六・宮本長二郎 1996 『家形はにわ』日本の美術5 至文堂 東京
- 山川守男・盛 敬彰・金子彰男・中村正明・橋本雅夫・松本和弘 1981 「新発見の埴輪窯跡群」『いぶき』12号 埼玉県立本庄高等学校考古学部 本庄 pp.29-40
- 山崎 武 2000 「埼玉県の円筒埴輪編年について」『埴輪研究会誌』第4号 埴輪研究会 佐倉 pp.109-120
- 和田晴吾 1992 『群集墳と終末期古墳』『新版古代の日本』第5巻 近畿Ⅰ 角川書店 東京 pp.325-350

写 真

写真1



石神境古墳
墳丘全体検出状況 [南東から]

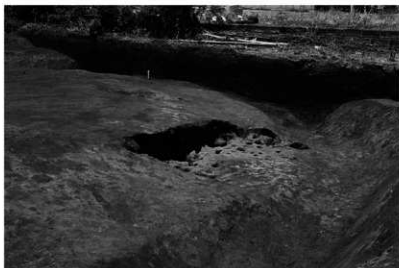


石神境古墳
墳丘南西半検出状況 [南東から]

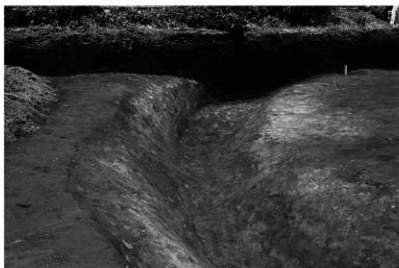


石神境古墳
墳丘北東半検出状況 [南東から]

写真2



石神境古墳
北西側周堀検出状況[南東から]



石神境古墳
南西側周堀検出状況[南東から]



石神境古墳
南西側周堀検出状況[北西から]

写真3



石神境古墳
陸橋北側形象埴輪検出状況
【北西から】



石神境古墳
陸橋北側形象埴輪検出状況
【北東から】



石神境古墳
陸橋北側形象埴輪検出状況
【東から】

写真4



石神境古墳
陸橋北側形象埴輪出土状況
[西から]



石神境古墳
陸橋北側形象埴輪出土状況
[南から]



石神境古墳
形象埴輪3 (男子人物)
出土状況 [南から]



石神境古墳
形象埴輪3 (男子人物)
出土状況【北西から】



石神境古墳
形象埴輪3 (男子人物) ほか
出土状況【西から】



石神境古墳
形象埴輪4 (女子人物)
出土状況【南から】

写真6



石神境古墳
形象埴輪5（女子人物）
出土状況【南から】



石神境古墳
周堀内円筒埴輪出土状況



石神境古墳
周堀内円筒埴輪出土状況



石神境古墳
周堀内円筒埴輪検出状況

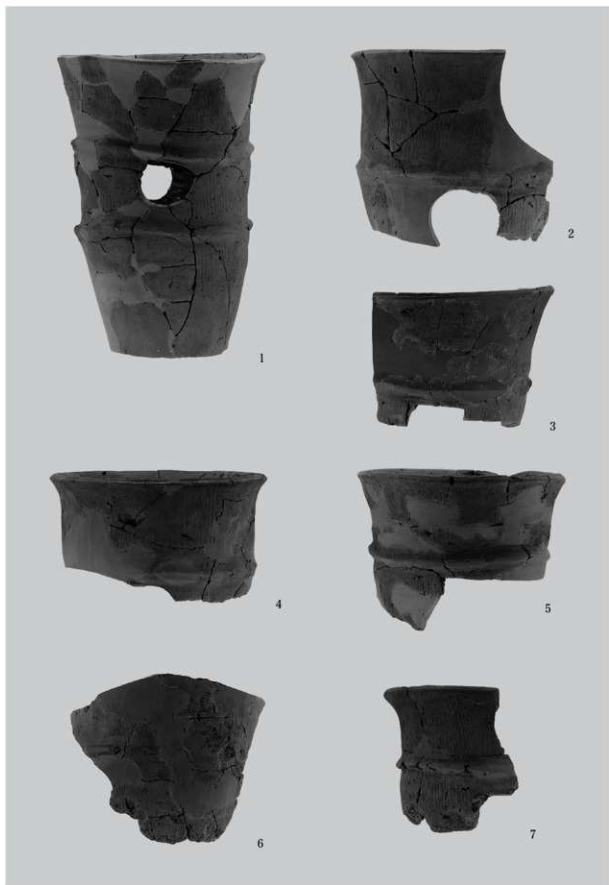


石神境古墳
周堀内円筒埴輪検出状況

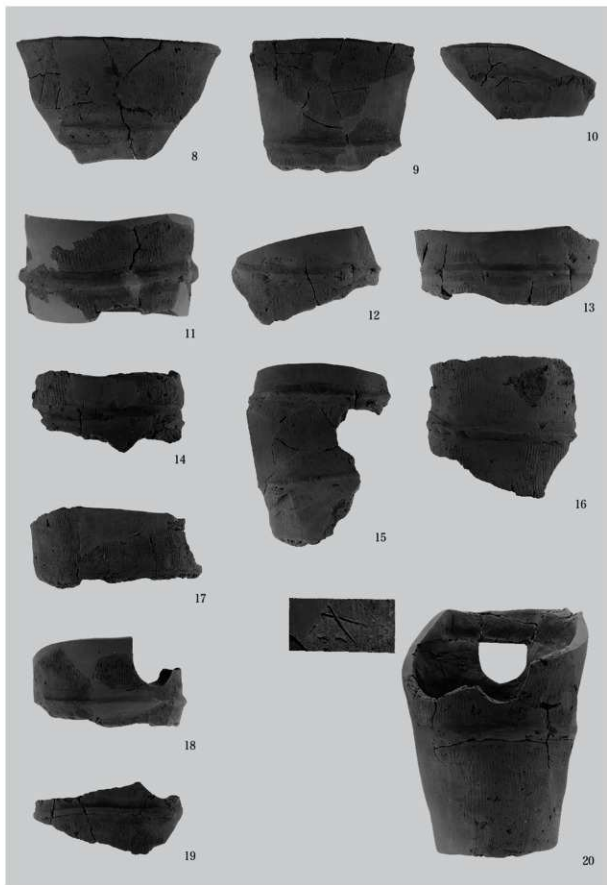


石神境古墳
周堀内円筒埴輪検出状況

写真8

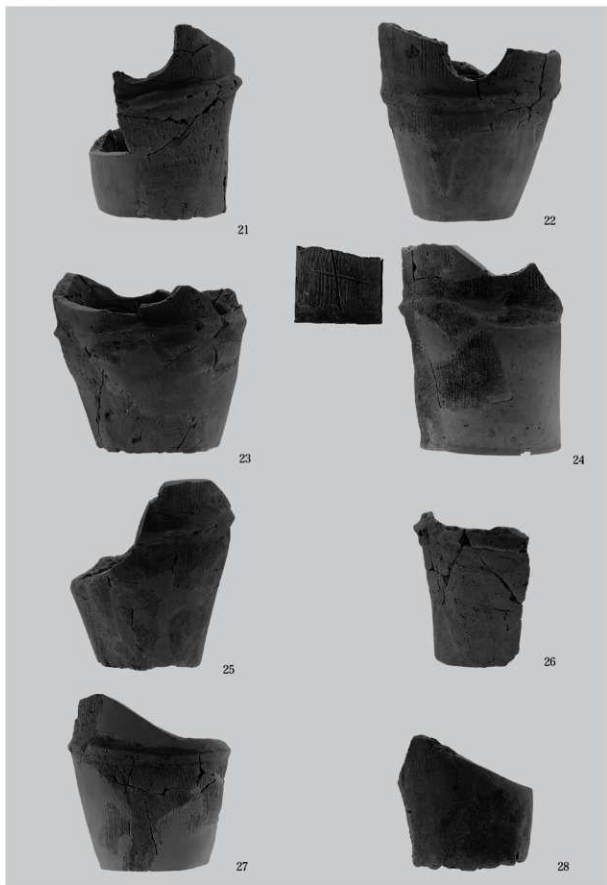


石神境古墳出土土円筒埴輪(1)

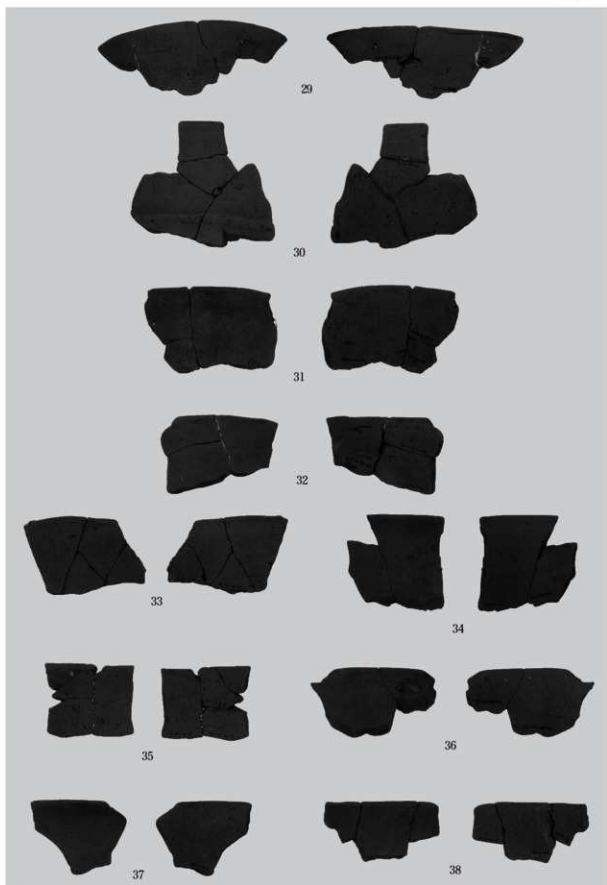


石神境古墳出土土円筒埴輪②

写真10

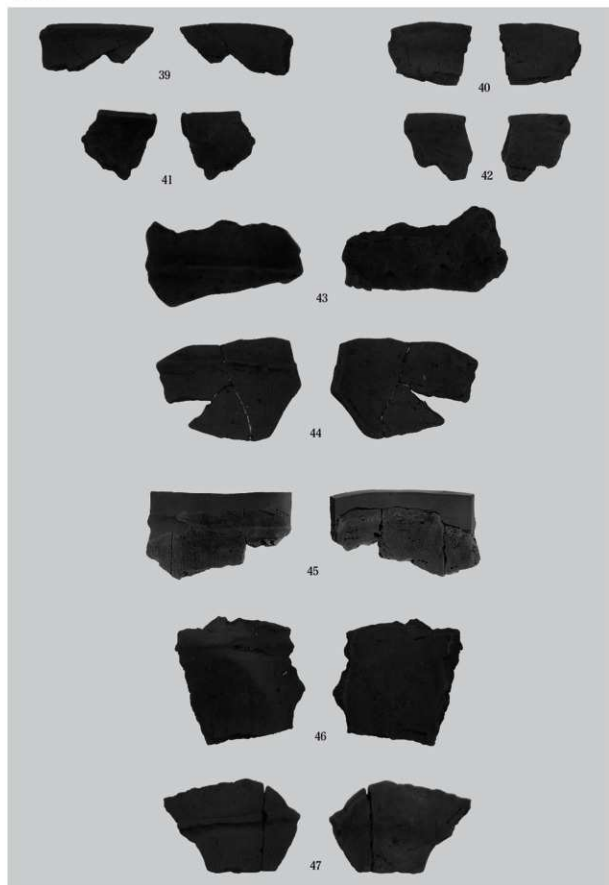


石神境古墳出土土円筒埴輪(3)

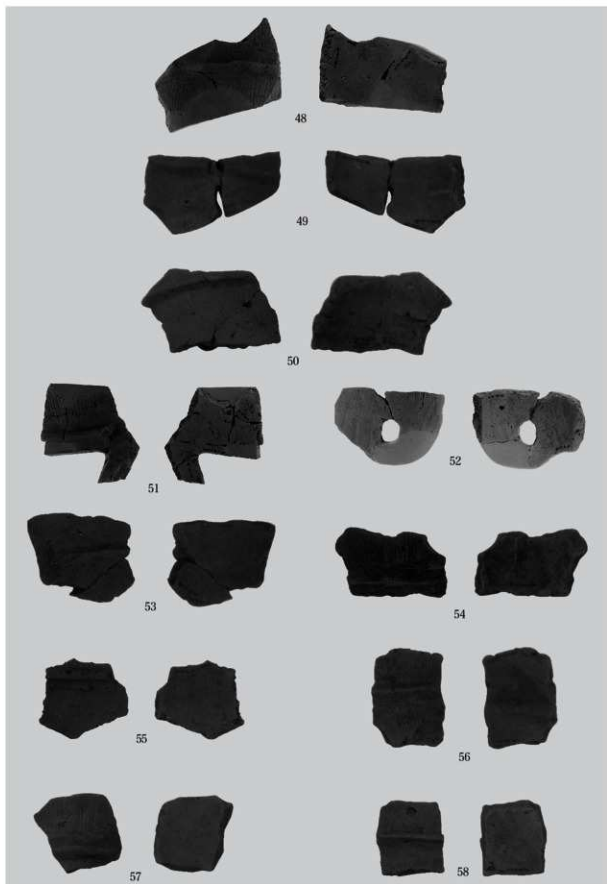


石神境古墳出土土円筒埴輪(4)

写真12

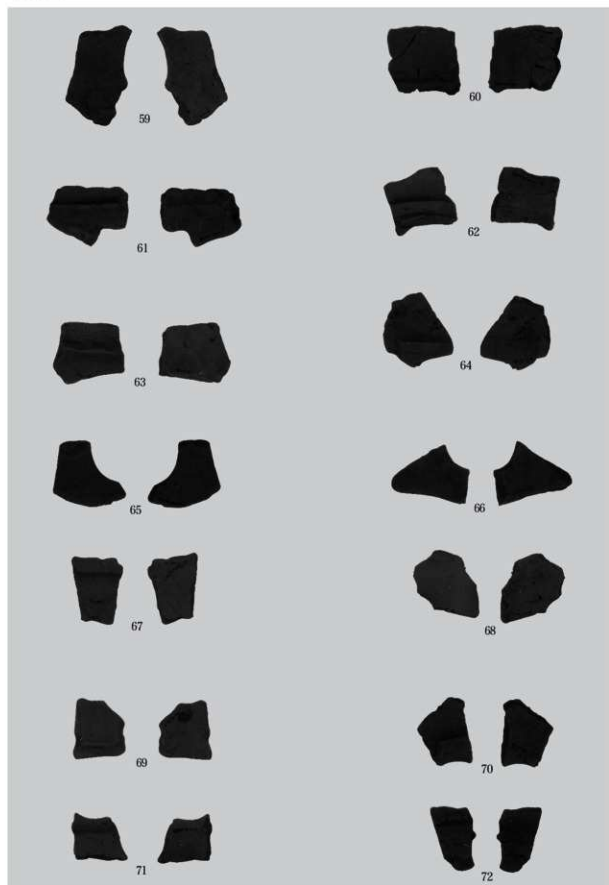


石神境古墳出土土円筒埴輪(5)

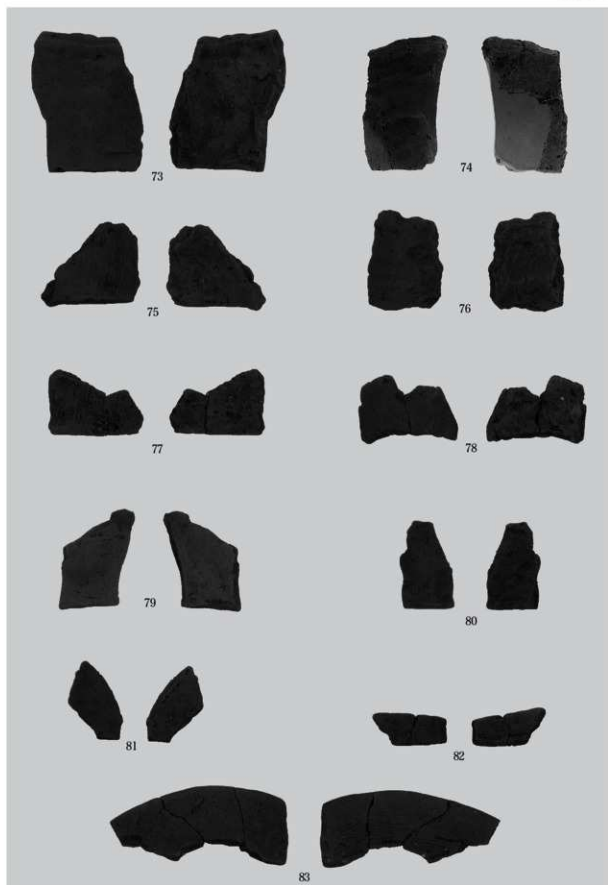


石神境古墳出土土円筒埴輪(6)

写真14



石神境古墳出土土円筒埴輪(7)



石神境古墳出土円筒・朝顔形埴輪(8)



石神境古墳出土形象埴輪(1)



2

石神境古墳出土形象埴輪2)



石神境古墳出土形象埴輪(3)



石神境古墳出土形象埴輪(4)



石神境古墳出土形象埴輪(5)

報告書抄録

ふりがな	あさひ・おじまこふんぐん いしがみざかいこふん							
書名	旭・小島古墳群 石神境古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話0495-25-1185							
発行年月日	西暦2010(平成22)年3月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (m)	調査面積	調査原因
		市町村	道庁番号					
旭・小島古墳群	埼玉県本庄市万年寺1丁目	112119	171	36°14'48"	139°10'19"	19850620 } 19850801	1,700㎡	土取り
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旭・小島古墳	古墳	古墳時代後期		古墳		円筒埴輪、形象埴輪		

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第21集

旭・小島古墳群

— 石神境古墳 —

平成22年3月25日 印刷

平成22年3月30日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷 株式会社タカサキ印刷